田原本町埋蔵文化財調査概要　5

小阪里中古墳・里中遺跡

発掘調査概報

1987

田原本町教育委員会

発掘区全景（南西から）

巻頭図版

序

古代日本の一中心地であった奈良県には数多くの遺跡、特に古墳が集中しているところであります。奈良盆地の周辺部には、今なお巨大な墳墓が群在し、当時の被葬者の勢力がしのばれます。

わが田原本町は奈良盆地のほぼ中央に位置し、弥生時代から唐古・鍵遺跡をはじめとして農耕文化の栄えたところであります。また古墳時代においては、重要文化財に指定されている牛の埴輪はあまりにも有名です。このように古代より重要な一地域でありながら古墳についてはほとんど判っておりませんでした。奈良盆地は古くから水田開発が進み、破壊された古墳は数知れないと思われます。本町におきましても古墳らしき痕跡はみられますが、確かなものはありません。

今回、小阪里中古墳を発掘できたことは盆地中央部の古墳研究に一石を投じることになりました。不幸にも墳丘は残っていませんでしたが、周濠から多数の埴輪が出土し大きな成果となりました。また、中世・近世の寺院と小坂氏の邸宅跡も合わせて調査ができたことは予想外の成果でありました。本町において現集落と中・近世集落の関係をつかめたことは意味あるものと考えます。本書に示した調査成果が幾分なりとも御活用していただければ幸いに存じます。しかしながら、まだまだ不備、不足な点があるかと思います。御批判、御教示を賜われば幸甚です。

最後に、浪速住宅株式会社、大和ハウス工業株式会社、奈良県教育委員会をはじめとする関係諸機関の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月31日

田原本町教育委員会
教育長　岩　井　光　男

例　　言

1．本書は、浪速住宅株式会社（代表取締役　鯉谷数能）の依頼により、田原本町小阪230-3番地他において実施した、配送センター及び事務所新築工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．調査は、田原本町教育委員会　社会教育課が担当し、昭和61年６月19日から同年８月３日にかけて実施した。現地調査は藤田三郎が担当した。

3．調査にあたっては、浪速住宅株式会社代表取締役　鯉谷数能氏ならびに大和ハウス工業株式会社奈良支店支店長　西村正宜氏より多大な御理解と御協力とを賜わった。

4．現地での作業にあたっては、大和ハウス工業株式会社奈良支店設計二課課長　中西重治氏の手をわずらわせた。

5．調査補助員として、前川浩一、豆谷和之、広瀬克彦、久山高史、樋泉彰子（以上奈良大学文学部）、吉井秀夫（京都大学文学部）の学生諸氏が参加した。

　出土遺物の整理作業にあたっては、上記学生諸氏の他、有本雅己、梅原一恵、河野典子諸氏の協力があった。

6．本書の作成にあたっては、下記の方々より御教示を賜わった。記して感謝の意を表します。

　奈良県立民俗博物館　大宮守人

　奈良県教育委員会文化財保存課　今尾文昭

　小阪幹文

　吉田芳弘

7．本概報の執筆は、Ⅲ．遺物　２．古墳時代の遺物　円筒埴輪　形象埴輪：豆谷和之

　　３．中・近世の遺物　ＳＤ－０１出土石製品　火打ち石：有本雅己

　その他については藤田が執筆し、編集をおこなった。

目　　次

Ⅰ．序　　章

1．調査の契機と経過 …… 1

2．位置と環境 …… 2

Ⅱ．遺　　構

1．層序 …… 4

2．弥生時代の遺構 …… 6

ＳＫ-101，ＳＫ-102，ＳＫ-103

3．古墳時代の遺構 …… 7

里中古墳，ＳＤ-101

4．中・近世の遺構 …… 8

ＳＥ-01，ＳＤ-03，ＳＤ-05，ＳＤ-02，ＳＤ-01

Ⅲ．遺　　物

1．弥生時代の遺物 …… 10

弥生土器

2．古墳時代の遺物 …… 10

須恵器，円筒埴輪，形象埴輪，木製品

3．中・近世の遺物 …… 15

ＳＥ-01出土土器，ＳＤ-02出土遺物，ＳＤ-01出土遺物

ＳＤ-01出土瓦，ＳＤ-01出土木製品，ＳＤ-01出土石製品

Ⅳ．ま　と　め

1．里中古墳について …… 23

2．中・近世の遺構と小坂氏について …… 24

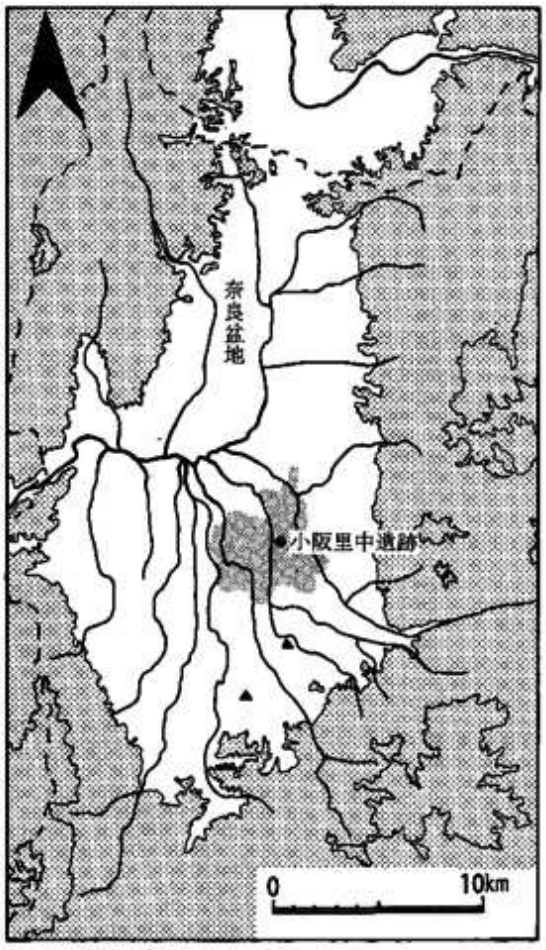
Ⅰ．序　　章

1．調査の契機と経過

田原本町内を縦断する国道24号線は多くの遺跡の上に敷設されている。ここにあげる小阪里中古墳及び里中遺跡も例外ではない。昭和61年４月に小阪230―3番地他8333㎡の開発協議が当教育委員会によせられた。当該地は国道24号線の西側にあたり、奈良県遺跡地図には11―Ｃ―54及び55の埋没した古墳があり、本地が範囲内に含まれると思われたため、発掘届の提出を要請した。その結果、昭和61年５月２日付で浪速住宅株式会社より上記届出書が提出され、町教育委員会が原因者負担で発掘をおこなうこととなった。

調査地は昭和40年代前半に盛土されており、現況では全く古墳を確認することはできない。また、国道24号線の開発も進んでおり古墳推定地の地理環境も把握しにくくなっている。このような状況のため、調査はまず、試掘調査をおこなうこととし、古墳の位置をおさえることにした。試掘調査は昭和61年６月19日から７月５日まで要した。古墳推定地に南北に２本のトレンチを設定し、古墳を確認することにしたが、遺構面の残存状況は極めて悪く,遺構の多くは削平を受けていた。試掘の結果、第１トレンチ（国道側）で古墳の周濠と思われるものと中・近世の大溝を検出した。また、第２トレンチ(寺川側)では中世の大溝と近代の堀を検出した。これは当初予想された古墳が検出できず、第１トレンチで検出された古墳については遺跡地図より20～30ｍ離れており、地図上の古墳かどうかは判断できなかった。しかし、この調査成果に基づいて、試掘より引き続いて本調査とし、８月３日まで調査をおこなった。本調査では試掘で確認された古墳の全容と新たに知られた中・近世の諸遺構を把握することを主に進めた。調査面積は1300㎡に及んだ。

調査の結果、周濠をもつ径20数ｍの円墳一基と中世から近世にかけての大溝・土坑・井戸など寺院・邸宅跡の諸遺構を検出し、多大な成果をあげることができた。



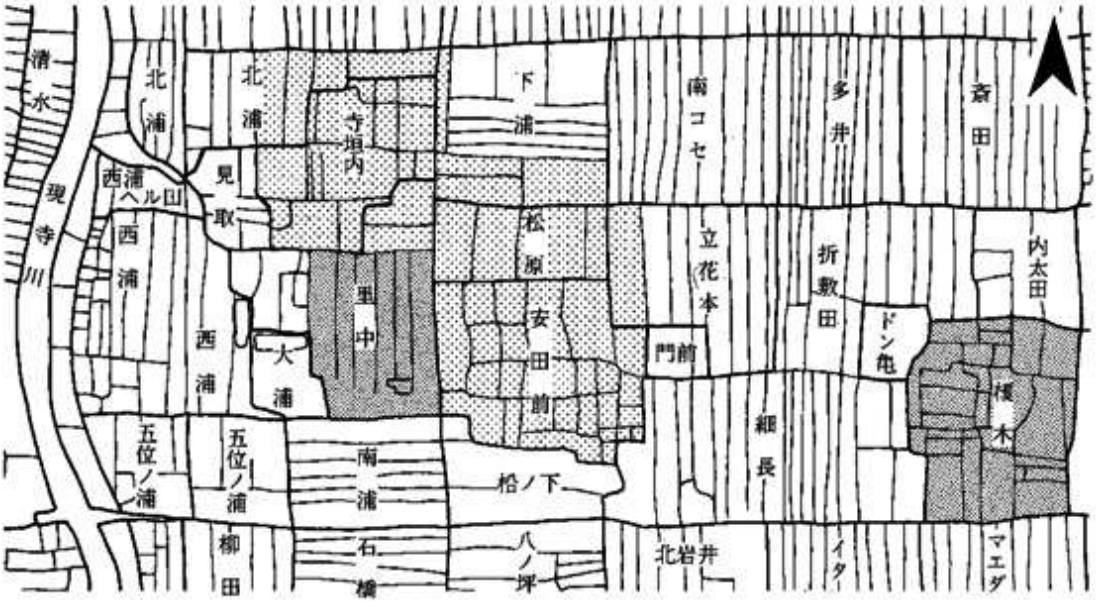
第１図　小阪里中遺跡の位置

2．位置と環境

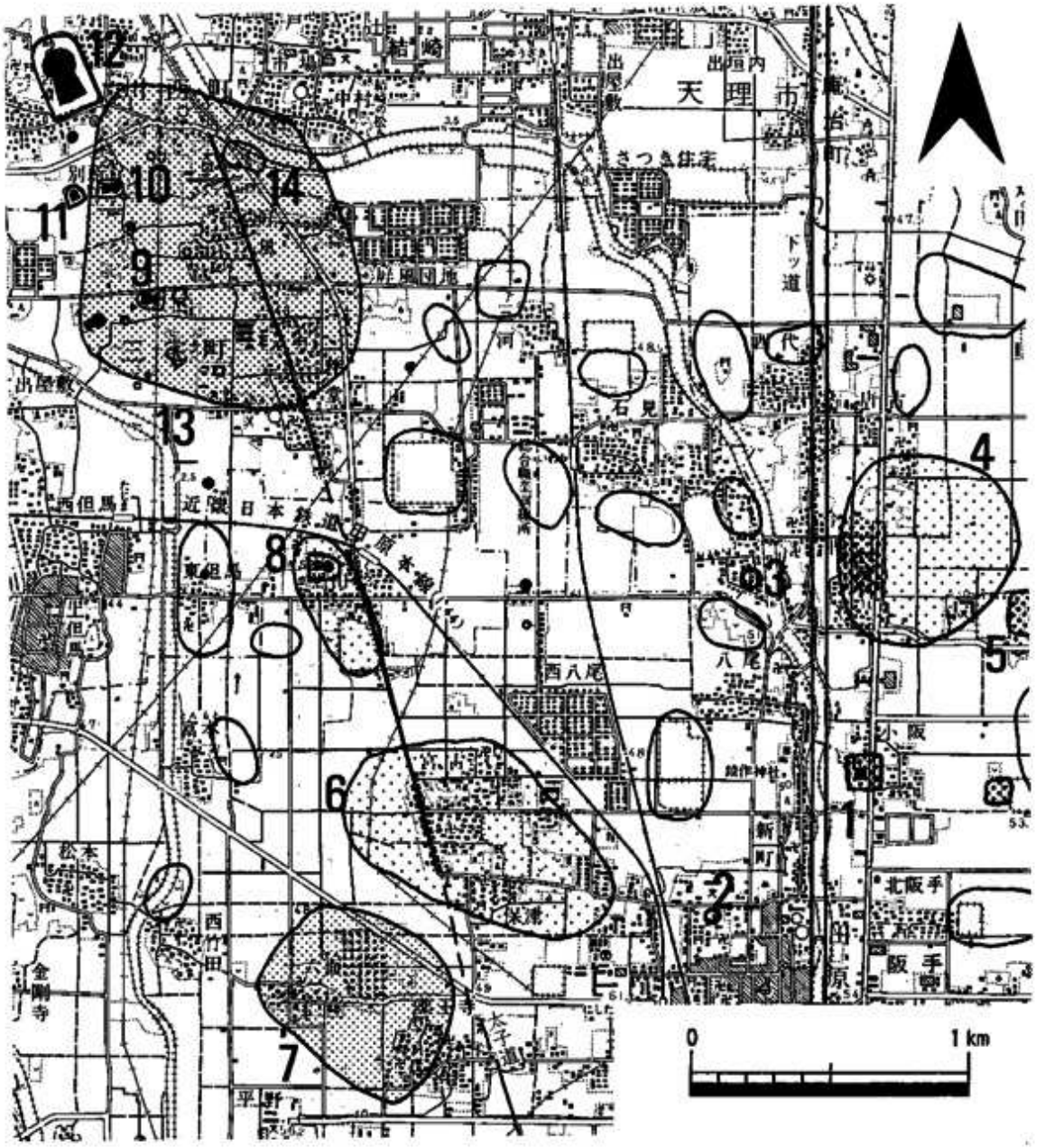
小阪里中古墳及び遺跡は奈良盆地のほぼ中央にあたる磯城郡田原本町大字小阪小字里中に位置している。盆地南半部では初瀬川、寺川、飛鳥川などが北流し、大和川となり河内平野に流れていく。この寺川沿いに立地しているのが本遺跡である。しかし、第２図にみるように遺跡の南辺には南東から北西方向に条里の不連続がみられ、この一部は請堤として今も残存している。また、この条里の不連続部分には「西浦」など浦の小字名を残しており、これが初瀬川あるいは寺川の一支流であったことを示していると思われる。このようなことから、本遺跡周辺の地理的環境もかなり変化しているが、この付近の等高線から南東から北西方向へ流れる川の北側で標高48～49ｍに遺跡が立地していたと考えてよかろう。

遺跡地は国道24号線に面しており、国道沿線付近の宅地化も急激に進んでいる。遺跡地周辺にはわずかに水田が残るのみで、環境の変化は著しいものがある。

本遺跡の立地する田原本町北部から三宅町にかけては多数の遺物散布地が濃密に分布している。特に弥生時代から古墳時代、および中世期の遺物散布地が多い。当遺跡の北方 500ｍには唐古・鍵遺跡、西方１kmには保津・宮古遺跡という弥生時代の拠点的集落が位置している。古墳時代の遺跡としては各種形象埴輪を出土した石見遺跡、羽子田遺跡が本遺跡より１kmの範囲内に点在している。また、島ノ山古墳を盟主とする三宅古墳群や黒田大塚古墳が里中古墳の北西方向2～4kmの範囲に広がっている。このような分布状況からみれば、当古墳周辺にも相当消滅した古墳が存在したのであろう。中世期においても唐古氏館跡・丹波山遺跡があり、本遺跡との関連が注目される。



第２図　小阪里中遺跡周辺の地籍と小字名　　中世遺跡　現集落



1．小阪里中遺跡
2．羽子田遺跡
3．石見遺跡
4．唐古・鍵遺跡
5．丹波山遺跡
6．保津・宮古遺跡
7．十六面・薬王寺遺跡
8．黒田遺跡・法楽寺跡
9．高山古墳
10．安養院古墳
11．寺ノ前古墳
12．島ノ山古墳
13．屏風遺跡
14．面塚遺跡

主要弥生時代遺跡

主要古墳時代遺跡

主要中世遺跡

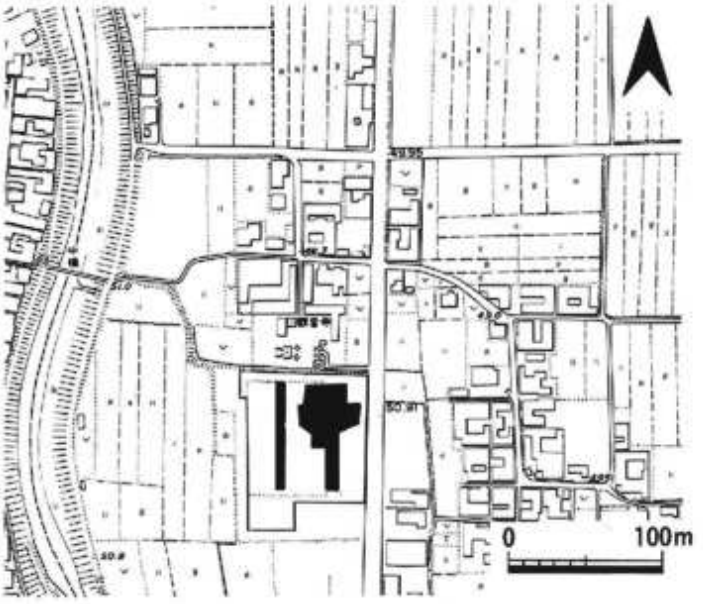
第3図　小阪里中遺跡周辺の遺跡分布図（2万5千分の1）

Ⅱ．遺　　構

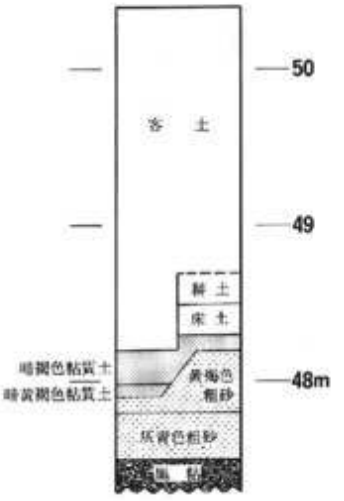
1．層序

発掘調査区内の堆積土層は大半が客土である。これは昭和40年代に造成された折のものであるが、この造成時には水田の耕土と床土の大半を除去し、造成したことを地元の人より聞くことができた。調査区内のほとんどは約1.7mの客土を除去すると中・近世の遺構等を検出できたことから、水田耕土と床土を除去したことは明らかであった。遺構面は削平を受けていることから、堆積土層の復元は困難であるが、水田耕土・床土(暗灰青色粘質土)の下に暗褐色粘質土が約30cm堆積している部分があり、この上面が本来の中・近世の遺構検出面と思われる。しかし、大半はこの暗褐色粘質土もなく、その下層である暗黄褐色細砂～粗砂層の上面で弥生～中・近世の遺構を検出した。また、古墳も削平を受けていたため、墳丘は全く残存しておらず、周濠のみの検出となった。粗砂層の上面の標高は48.3m～48.2mである。

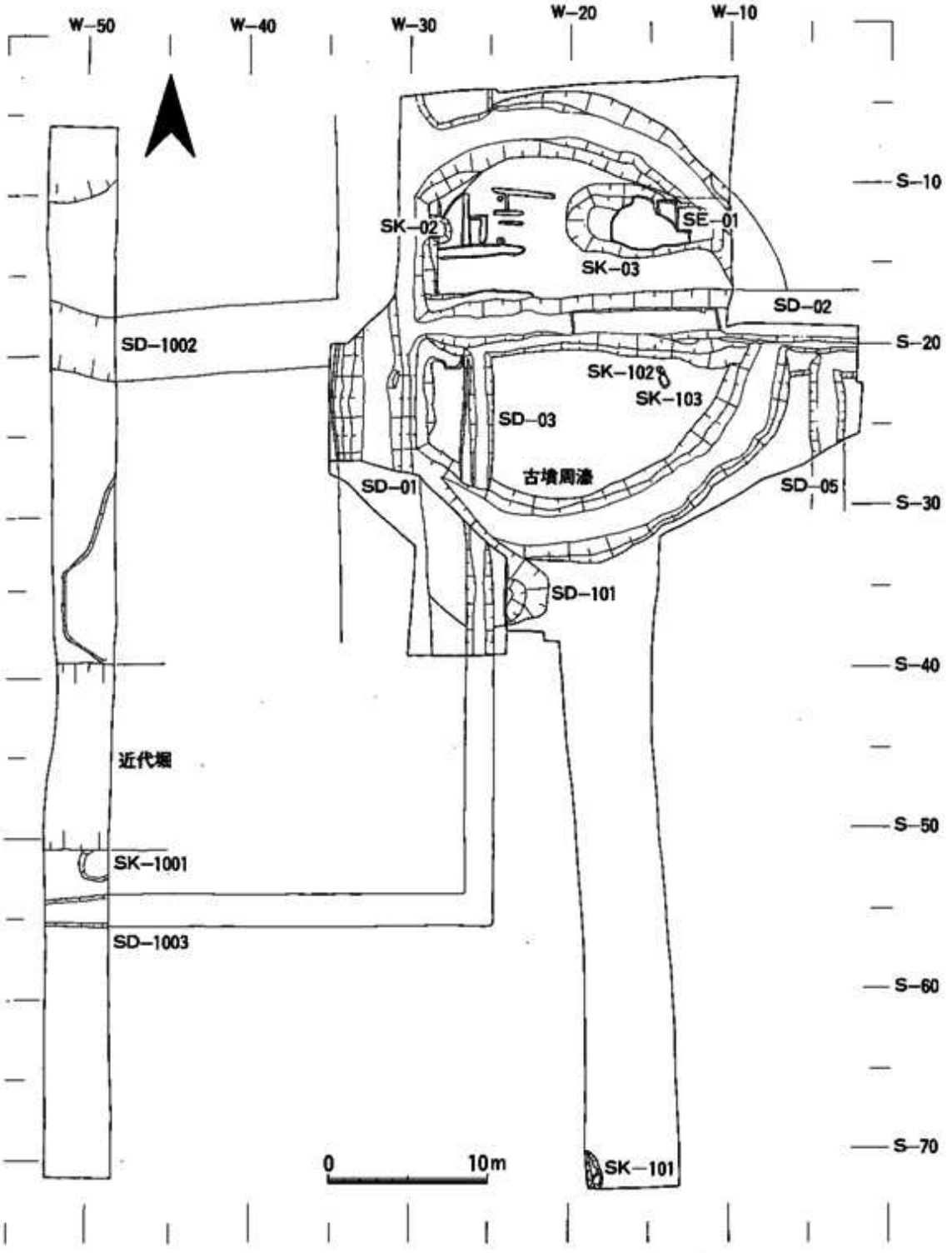
写真1　遺構検出状況



第4図　里中遺跡調査地位置図（5000分の1）



第5図　里中遺跡土層柱状図
(S=1/50)



第6図　小阪里中古墳・里中遺跡遺構平面図（S＝1/400）

2．弥生時代の遺構

ＳＫ－101

ＳＫ－101 は第１トレンチ南端で検出した土坑である。土坑はトレンチ調査区外におよんでいるため、その形態・規模は正確におさえられない。長径 2.3ｍ以上、短径 0.8ｍ以上を計る楕円形の土坑である。深さは浅くて 0.2ｍである。埋土は暗茶褐色粘砂層で単一層である。遺物は弥生時代後期の壺や甕の破片が出土した。

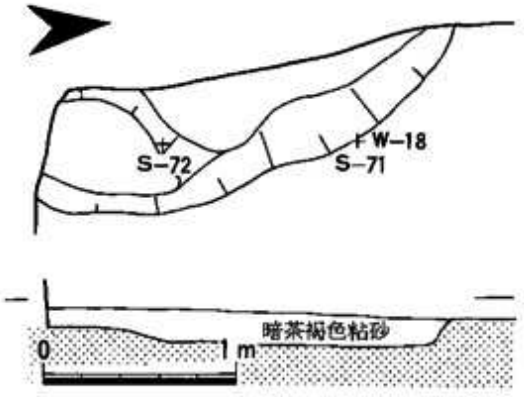
ＳＫ－102

ＳＫ－102 は第２トレンチの中央部で検出した小土坑である。上面は削平を受けていたが、土坑中央部で甕を検出した。甕は横転した状態で体部の半分は削平によって欠失していた。

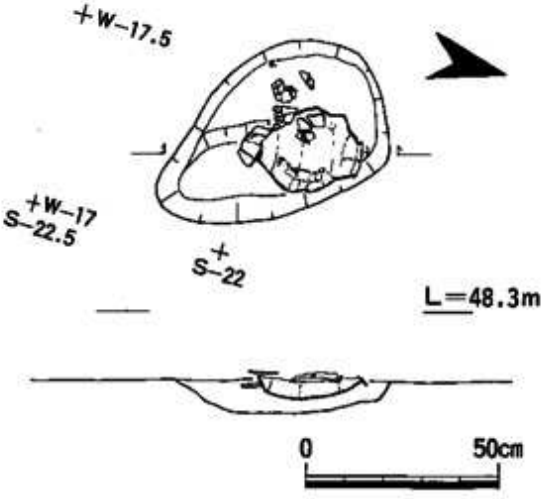
土坑は二段になっており、南側がわずかに深くなっている。土坑の規模は長径約0.65ｍ、短径約 0.4ｍ、深さ約 0.1ｍを計る。埋土は暗灰褐色粘質土の単一層である。土坑の性格としては土器の出土状況より甕棺墓とも考えられるが、断定できない。土坑の時期は甕から弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ－103

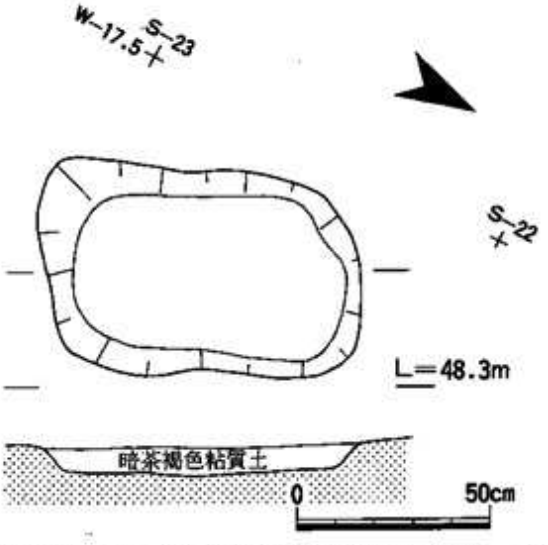
ＳＫ－103は前述ＳＫ－102の南側で検出した土坑である。楕円形の形態を有し、長径約0.85ｍ、短径約 0.5ｍを計る。土坑は上面を削平されており、深さは0.07ｍと浅い。土坑の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。遺物は全く出土していないので時期は不明であるが、ＳＫ－102と土坑の主軸を同じくすることから、同時期のものと考えられる。



第７図　SK－101 遺構平面図及び断面図(S=1/40)



第８図　SK－102 遺構平面図及び見とおし図 (S=1/20)



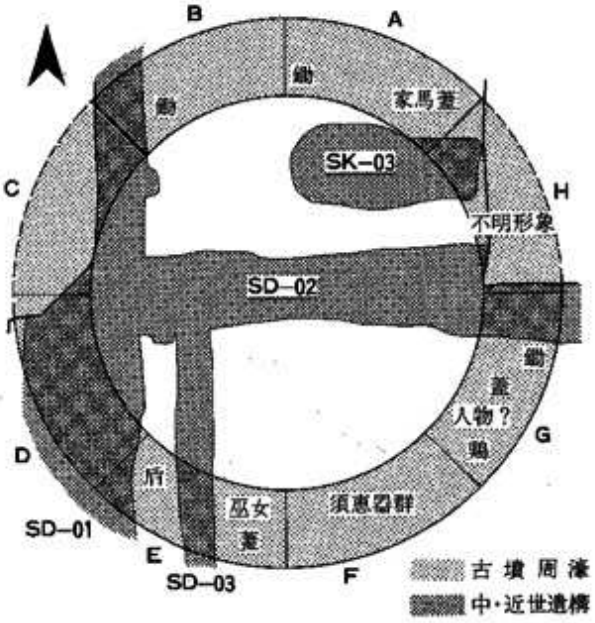
第９図　SK－103 遺構平面図及び断面図(S=1/20)

3．古墳時代の遺構

里中古墳

古墳は試掘調査時において周濠を確認し、その後、本調査では第1トレンチを東西に拡張してその全容を明らかにした。古墳は削平されており、また、中・近世の諸遺構によって破壊されていることから周濠のみ残存していた。

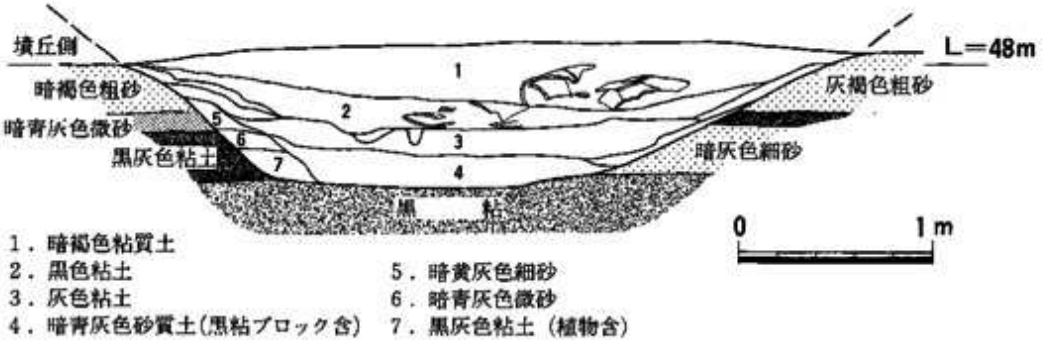
古墳の形態は周濠をもつ円墳である。墳丘基底部の直径約21.5m、周濠の幅約4m、深さ約0.8mを計る。墳丘の盛土は全く残存していなかった。また、古墳にともなう施設等の検出も削平の為できなかった。



第10図　古墳周濠の地区割と遺物出土位置模式図

周濠はほぼ検出したが、後世の破壊の為、周濠の約半分のみの残存となった。周濠内の堆積土は地区によって異なるが、三つに分かれる。上層は暗褐色粘質土で周濠の埋土である。この層からは大形の埴輪片が多量に含まれていた。中層は黒色粘土や灰黒色粘土層で堆水時に形成された土層である。この層では木器・埴輪が含まれていた。下層は細砂・砂質土層で墳丘からの流れ込みによって形成されたもので、ほぼ完存する円筒埴輪が墳丘から崩れ落ちた状態で多く検出した。

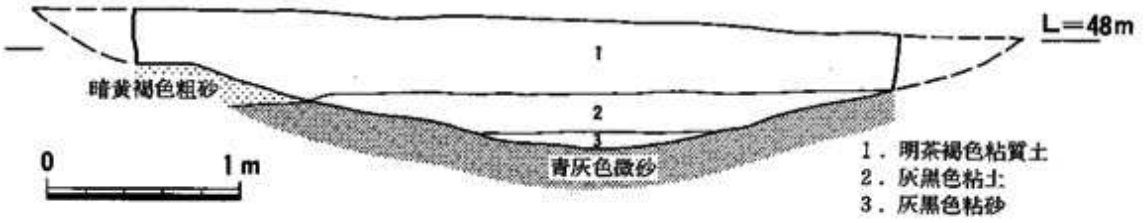
周濠を第10図にみるように八分割し、遺物の出土状況を説明する。墳丘から崩れ落ちた状態を良好に示す円筒埴輪はF・G区で、特にF区では須恵器高杯1点、高杯杯蓋4点がまとまって出土した。形象埴輪は大半が上層より出土している。A区では馬・家・蓋、E区で巫女、G区で鶏形埴輪等を検出した。また、下層では木製鋤がA・B・G区で出土している。



第11図　古墳周濠東壁土層断面図 F−G区（S=1/40）

ＳＤ－101

SD－101は里中古墳の南西側で検出した溝である。古墳の周濠を一部切って掘削されている。北西 ― 南東方向に軸をもつ溝で、南東側は収束している。溝幅推定 5.5m、深さ 0.8mを計る。溝の堆積は上層より、明茶灰色粘質土・灰黒色粘土・灰黒色粘砂層で形成されているが、周濠を切っている部分では堆積がやや異なる。遺物は少ないが、上層より６世紀後半の須恵器を検出している。溝の性格としては方墳の周濠とも考えられるが、調査範囲外に広がっているため、判断できない。



第12図　SD－101 溝西壁土層断面図（S＝1/40）

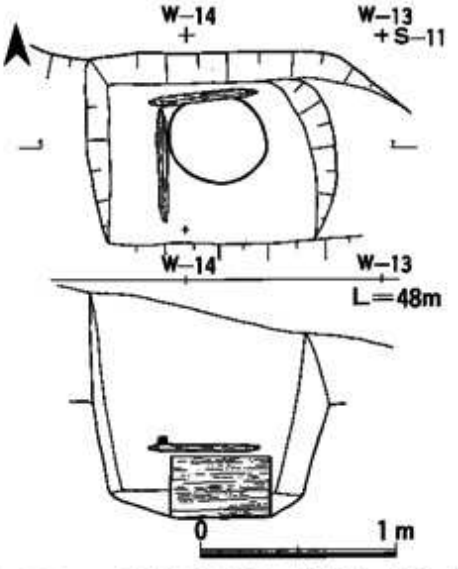
４．中・近世の遺構

ＳＥ－０１

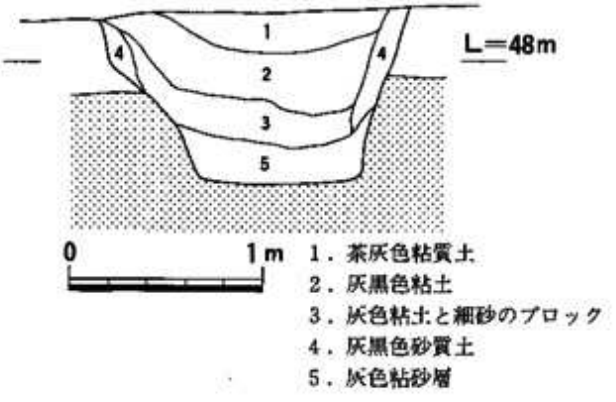
ＳＥ－０１は第１トレンチ北東拡張部分で検出した井戸である。上面をＳＫ－03によって切られているため、土坑上部をほとんど欠失している。しかし、土坑底部には曲物の井戸枠一段と曲物の上部に木組の一部が残存していた。上段の井戸枠は抜き取られたと思われる。土坑の埋土は暗灰色粘土で上部より半完形のねり鉢と瓦器椀等が出土した。

ＳＤ－０３

ＳＤ－０３は第１トレンチの西側拡張部分で検出した南北溝である。溝幅約２m、深さ 0.9mを計る。本溝は古墳やＳＤ－101の上部に掘削されている。溝の堆積土は大きく三分割でき、溝の下部が粘砂や粘土で埋没していることから、堆水状態であったと思われる。遺物は少ない。第２トレンチのＳＤ－1003の東西溝に連結すると思われる。



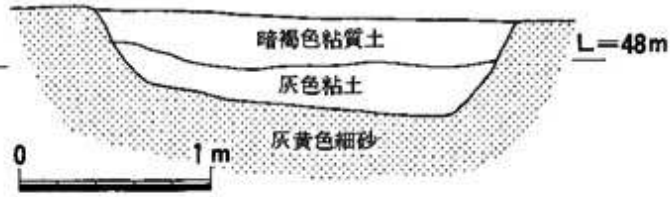
第13図　SE－01 遺構平面図及び見とおし図（S＝1/40）



第14図　SD－03 溝南壁土層断面図（S＝1/40）

ＳＤ－05

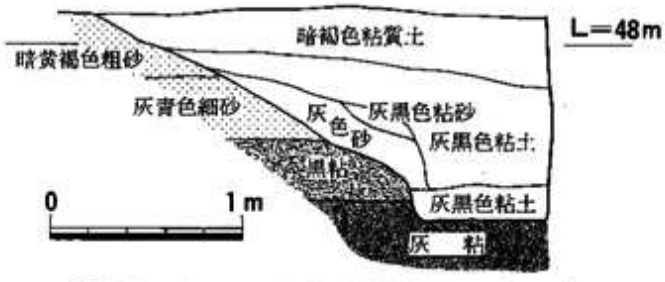
ＳＤ－05は第１トレンチ東側拡張部分で検出した南北溝である。溝幅約 2.2m、深さ 0.5mを計る浅い溝である。溝の埋土は二層に分かれ、上層は暗褐色粘質土、下層は灰色粘土層となる。遺物は土師皿を少し含んでいたのみで時期は判断しがたいがＳＤ－03と併行すると思われる。



第15図　SD－05 溝南壁土層断面図（S=1/60）

ＳＤ－02

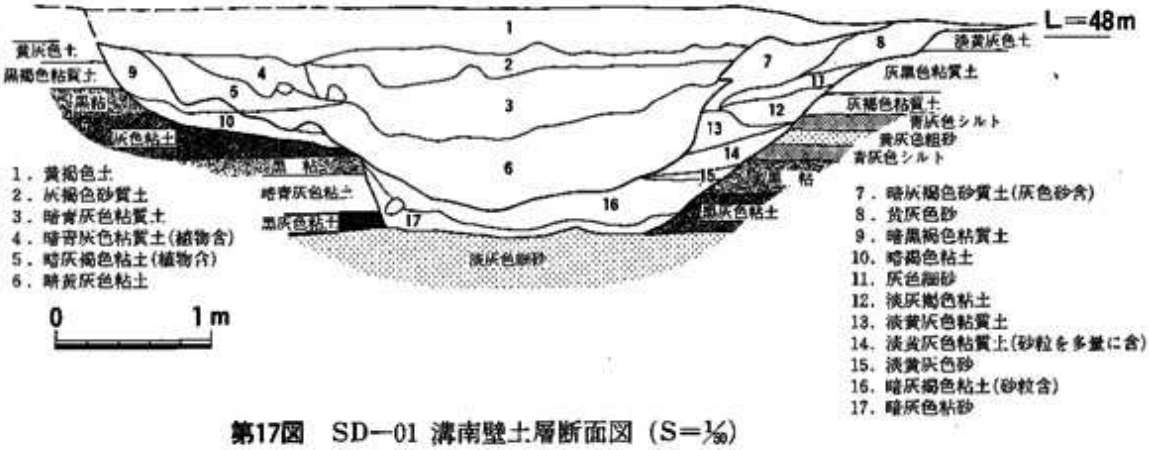
ＳＤ－02は第１トレンチ中央部で検出した東西溝である。古墳の中央部に掘削されている。溝幅約４ｍ、深さ0.7～1.3ｍを計る。溝はＷ－20～21区部分に杭が打ち込まれ、それより東側が深くなっている。堰の役割を果していたと思われる。溝の堆積は下層の灰黒色粘土と上層の暗褐色粘質土に大別できる。下層では瓦質土器、羽釜、陶器、漆椀、瓦を多量に検出した。



第16図　SD－02 溝東壁土層断面図（S=1/60）

ＳＤ－01

ＳＤ－01は第１トレンチ西側拡張部分で検出した南北溝である。溝幅約 6.5m、深さ 1.5mを計る大溝である。溝は堆積土層の観察の結果、再掘削をしていることが判明した。溝は最下層より瓦質土器等を多く検出していることからＳＤ－02と併行する16世紀後半頃と思われる。再掘削後は粘土層によって埋没するが、多量の陶磁器茶椀類、土師器類が出土した。また、「小坂□」の線刻を有する羽子板や漆塗箱なども出土した。



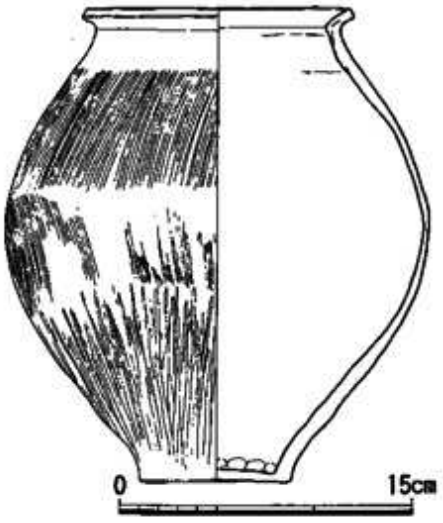
第17図　SD－01 溝南壁土層断面図（S=1/60）

Ⅲ．遺　　物

1．弥生時代の遺物

弥生土器

第18図はＳＫ－102より出土した土器である。口縁部から体部の一部を欠損するが、これは遺構面の削平時に失われたものと思われる。体部中位に張りを有する甕で、口縁部は短く外反する。外面の体部上半はハケ調整、下半はケズリの後、ミガキ調整をおこなっている。内面は丁寧なナデ調整がみられる。頸部ちかくの内面には接合痕が残っている。甕の形態・調整から第Ⅲ様式後半から第Ⅳ様式の一時期におさえられると思われる。



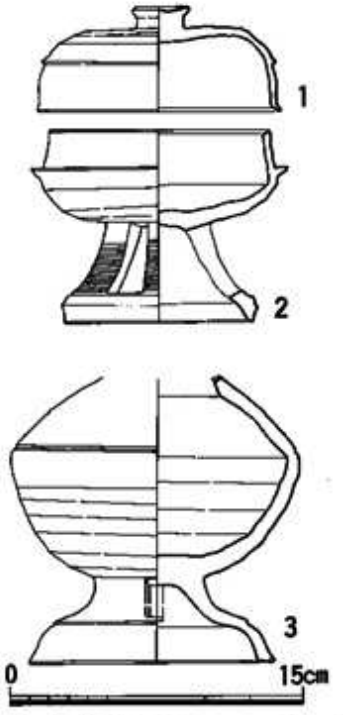
第18図　SK－102 出土土器（S＝¼）

2．古墳時代の遺物

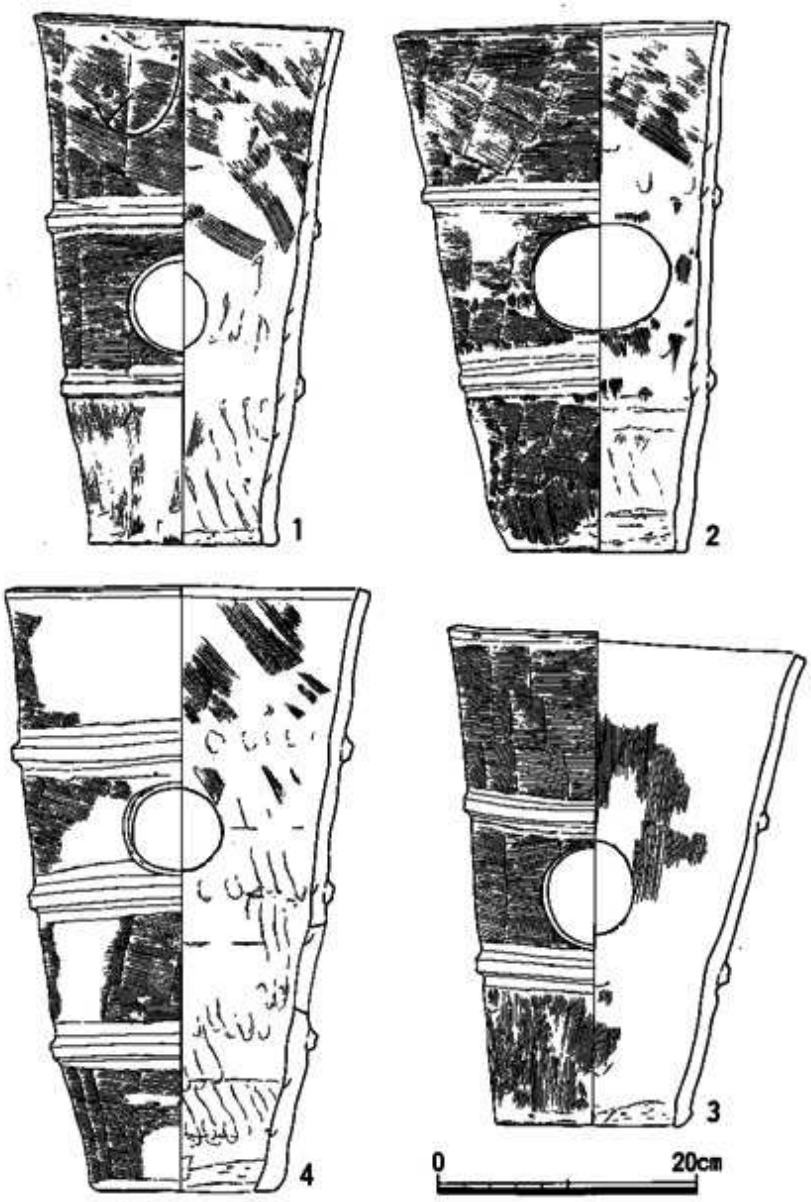
須恵器

須恵器は古墳周濠及び中・近世遺構の混在として多数検出している。周濠からは大甕、壺、有蓋高杯、器台片が出土しているが、特に、F区からは完存する有蓋高杯の蓋4点、有蓋高杯1点を検出している。第19図の1・2はその一部である。1は口径12.4cm、器高 5.4cmを計る。扁平なつまみを有し、天井部はやや凹む。口縁端部は凹部を呈する。稜部は鋭い。外面の天井部の大部分には回転ヘラケズリがみられる。2は口径11.2cm、器高10cmを計る。口縁端部は凹部を呈し、受部は鋭い。脚部には方形の透孔を三方に穿っている。底部の大部分には回転ヘラケズリがみられる。1・2とも焼成良好でロクロの回転は右回りである。

第19図の3はＳＤ－101より出土した台付長頸壺である。口頸部と胴部・台部の一部を欠失する。台部径12.4cmを計る。胴部は均整のとれた形態であるが、台部は外方へ大きく広がる。方形の透孔が二方に穿たれている。体部下半は回転ヘラケズリの後、回転ヨコナデをおこなっている。ＳＤ－101からはこの他、壺、高杯杯身片が出土している。



第19図　古墳周濠・SD－101 出土土器（S＝¼）

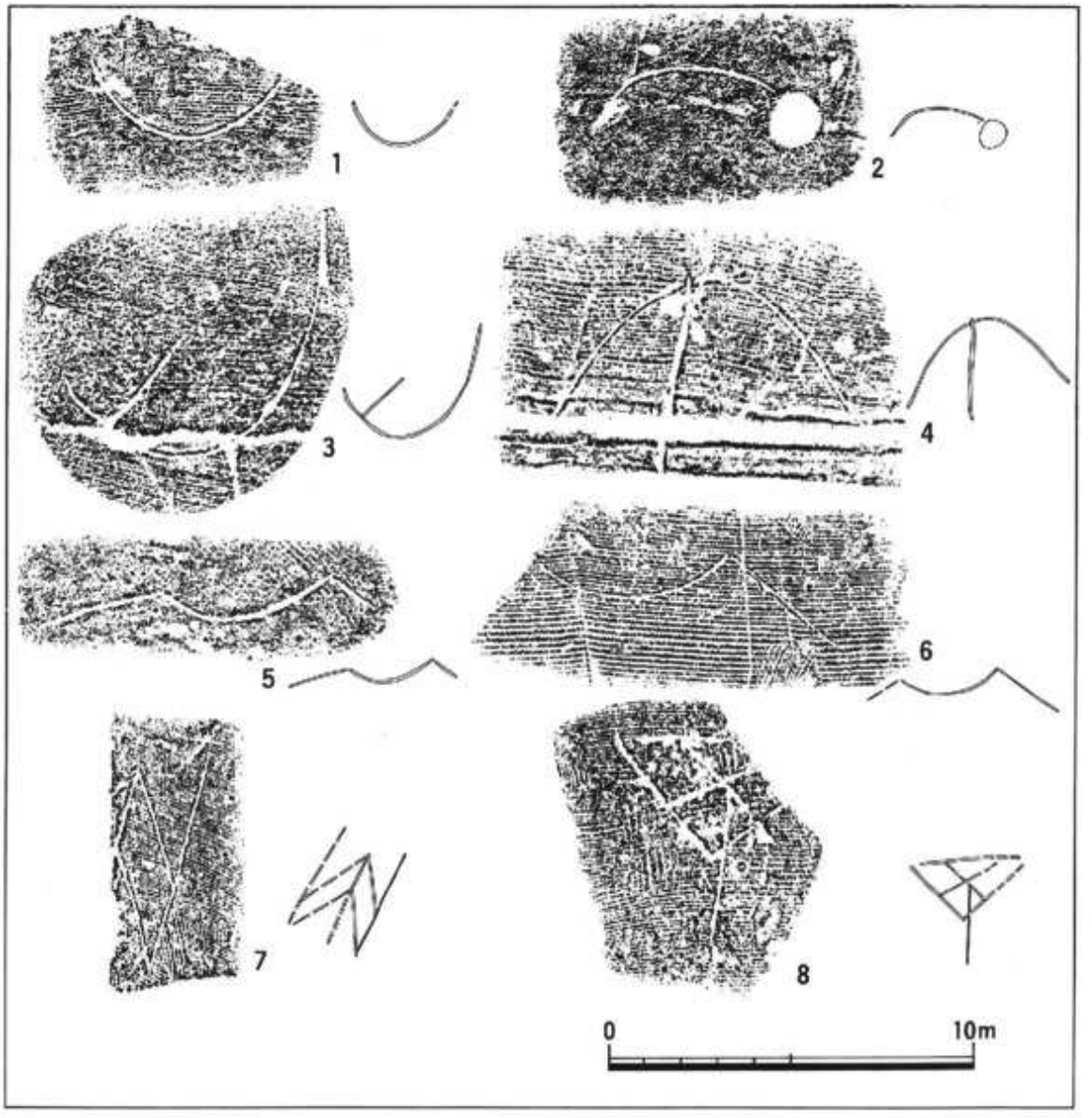


第20図　古墳周濠出土円筒埴輪（S＝⅙）

円筒埴輪

円筒埴輪は古墳周濠および二次的な中・近世の遺構から多量に出土した。ほぼ完存するものは、古墳から崩れ落ちたもので、E区～F区において検出している。朝顔形埴輪も円筒埴輪と同様な出土状況であるが、個体数は少ない。

円筒埴輪は器高40～50cm、口縁径23～27cmを計る小形の円筒埴輪で、基部から口縁部にむかっ



第21図　円筒埴輪・朝顔形埴輪における記号文（拓影½・模式図¼）

て外反する。タガは２条と３条のものがある。円筒埴輪の調整はタテハケの後、連続的なヨコハケが器面を離れることなく一周する。基部内面にはケズリがみられる。焼成は無黒斑で、須恵質を呈するものも含んでいる。また、多くの円筒埴輪には第21図に示すような記号文が刻まれている。二、三保存状態の良いものについて図示し、調整を中心に説明する。

第20図－１の外面はタテハケを施した後、基部はナデ調整、一段目と口縁部はヨコハケをおこなう。口縁端部はヨコナデによって凹面を呈する。内面は基部にケズリがおこなわれる。また、タテハケが施されるが、丁寧なナデ調整によって消される。口縁部内面にはナナメハケがみられ

る。記号文はU字形にナナメの一線が加えられたものである（第21図－３）。第20図－２も１と同様の調整が施されているが、基底部付近はヨコハケがおよんでいない。タガは上面を強くヨコナデをおこなっているが、下端には接合痕が残っている。口縁端部はヨコナデによって凹面をなす。内面は基底部をケズリ、それより上部はタテハケ後ナデ調整をおこないハケを消している。記号文は第21図－８にみられるような逆三角形とX印と縦線の結合したものである。第20図－３は１と同様の調整手法である。記号文も類似しているがU字形のみの記号である。第20図－４は器高47cmを計り、同古墳の円筒埴輪では大形品となる。タガも３条となり、調整も他より丁寧である。外面はタテハケの後、ヨコハケを全面に施す。タガは上下端を強くヨコナデするため、接合痕はみえない。内面の基底部にはケズリがみられるが、ほとんど粘土が削られておらず、内側へ粘土が圧しつぶされた状態で残っている。透孔は円孔で一段目と二段目に穿たれている。ヘラ記号については不明である。

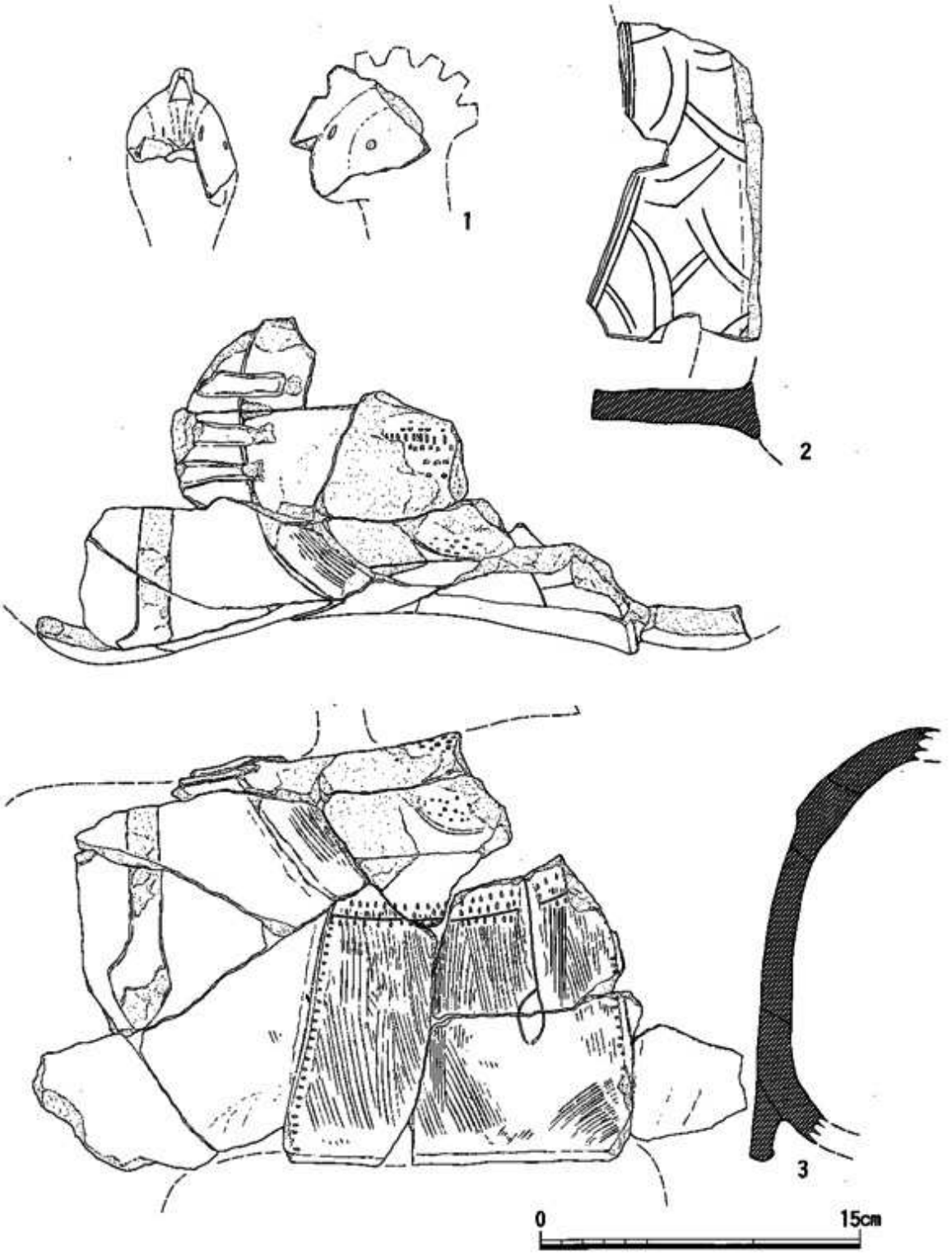
形象埴輪

里中古墳より出土した形象埴輪は多種あるが、原位置を保つものはない。また、円筒埴輪のように墳丘から崩れ落ちた状況を示すものでなく、周濠内でも上層で検出し、小片となっている。大半のものは二次的な中・近世遺構より出土している。形象埴輪の一部は第22図に示したが、それ以外のものとしては、蓋形埴輪、家形埴輪（図版10－5･6）、巫女形埴輪（図版11－３）、人物の腕らしき破片、盾形埴輪(図版11－4)、不明形象（図版11－２）などがある。蓋・家形埴輪は複数個体を数える。

鶏形埴輪　本埴輪は周濠古墳G区の中央より頭部のみ出土した。嘴は粘土をつまみ出し両側面に線刻を入れることによって口を表現し、耳朶は粘土を貼り付け、また目と鼻は鋭い棒状の工具によって刺突する。高く突出させた鶏冠は鋸歯状に切り取り写実的な表現をとっている。

盾形埴輪　古墳周濠のE区より出土した。この埴輪は板状をなし、２条一対の直弧文を入れた面を表とし、右側面は円筒部との剥離面がみられる。左側面は上部と下部を広がらせ、中央部をコの字状に切り取る。このような形態から、石見型埴輪の側面中央部の鰭と考えられる。

馬形埴輪　本埴輪は古墳周濠のA区及び中・近世遺構より小破片となって出土した。よって鞍をのせた胴部を残すのみで、更には鞍の頂部より左半身を欠失する。鞍は粘土の貼り付けと強いナデによって高まりを作り、下鞍と障泥を表現している。障泥の両側と下鞍との境には、鋭い工具の刺突によって皮綴の表現がなされる。障泥及び下鞍には意識的にハケが残されている。また、やや頸部方向によった障泥の表面には、ヘラ状工具によって先端を杏仁形にした沈線がひかれ鐙の表現がなされている。鞍橋は前輪を欠失し、後輪は下鞍に残された剥離面によってその位置を知ることができるのみである。前輪と後輪の間は、下鞍より更に高められ、先の鋭い工具の刺突によって、敷物の表現がなされている。後輪の欠失によって尻繋の連結部は明らかではないが、現状では下鞍に３本の粘土帯が貼り付けられている。右後足上部には、先を剣菱状に尖らせた粘土の貼り付けが見られ、杏葉を表現したものと思われる。

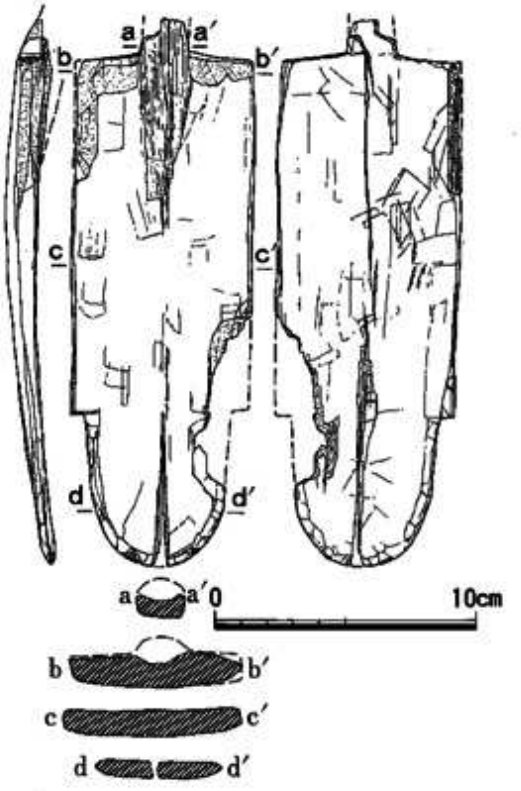


第22図　里中古墳出土形象埴輪（S＝⅓）

木製品

里中古墳の周濠内より３点の一木鋤が出土している。Ａ区から刃部と把手を欠失した鋤（図版４－ａ）、Ｂ区から柄の部分（図版９－８）、Ｇ区から鋤先（図版９－９、第23図）が各々破片となって出土している。第23図の一木鋤は柄を欠失しているが、身はほぼ形のわかるものである。身の肩部を左右に突出させ、身の先端は一段削りこんで着装部をつくる。着装部はＵ字形に、両面から削り、鉄刃を装着しやすくしている。身部の後面はわずかに内反りしている。柄は身部後面よりつくり出し、身と柄は水平でなく鈍角をなす。

一木鋤の他、古墳の周濠からは用途不明の木製品が数点出土している。Ｂ区からは周濠の上層より建築部材状の木製品（図版９－10）が出土している。これは全長９６cmを計るもので、両端の片側のみ突出させつくり出している。また、下層より一端に抉りを入れた全長２９２cmの棒（図版５－ｂ）も検出している。

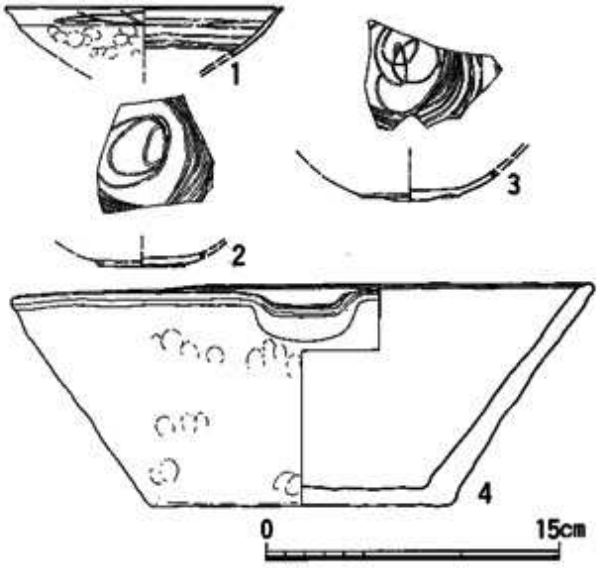


第23図　古墳周濠出土木製品（Ｓ＝⅛）

３．中・近世の遺物

ＳＥ－01出土土器

ＳＥ－01からは瓦器椀と鉢が出土している。第24図１～３は椀が浅くなり、わずかに高台を残す形態のものである。口縁部には一条の沈線がめぐらされている。外面には指頭圧痕と横位の暗文、内面にも横位の暗文と底部に輪状の暗文を施す。４は信楽焼と思われる鉢で片口を有するものである。ほぼ完存する。口縁部はわずかに凹面をもつ。外面は成形時の指頭圧痕を残す。内面はヨコナデが施されている。



第24図　ＳＥ－01 出土土器（Ｓ＝¼）

ＳＤ－02出土遺物（第25図）

ＳＤ－02から出土した土器はごく少量の磁器を含むが、大半は土師器と瓦質土器、陶器で構成される土器群である。また、この溝からは瓦も多く出土している。さらに木製品では羽子板（図版14－７）や漆椀なども出土している。遺物の大半は第２層・灰黒色粘土層より出土している。

第25図に示したものはその一部である。溝の第１層より出土した土器は第25図４・５・７・８・11・24で他は全て第２層より出土した。第１層と２層ではほとんど時期差はない。

土師皿　１～３は口径10cm前後のものである。１の口縁はややハネ上げ気味になっている。１２ともに口縁部はヨコナデがみられる。３は前者に比べ薄手で、外面には指頭圧痕を残す。

灰釉皿　４～８は灰釉皿で、４～６は暗灰緑色、７・８は淡赤灰色の釉色を呈す。瀬戸・美濃系と思われる。４は口径 5.2cmの小形の皿で内側の底に四花弁の押印がある。５は口径８.8cmを計り、口縁は内湾ぎみである。高台は小さく、目付け痕が残る。６は口縁部が上方へ突出する折縁皿である。内面中央は釉をかきとっている。また、高台の内側には輪状に目付け痕が残る。８は内縁部に沈線がめぐる。底部はヘラ切りによって突出する。内面には４カ所目付痕が残る。

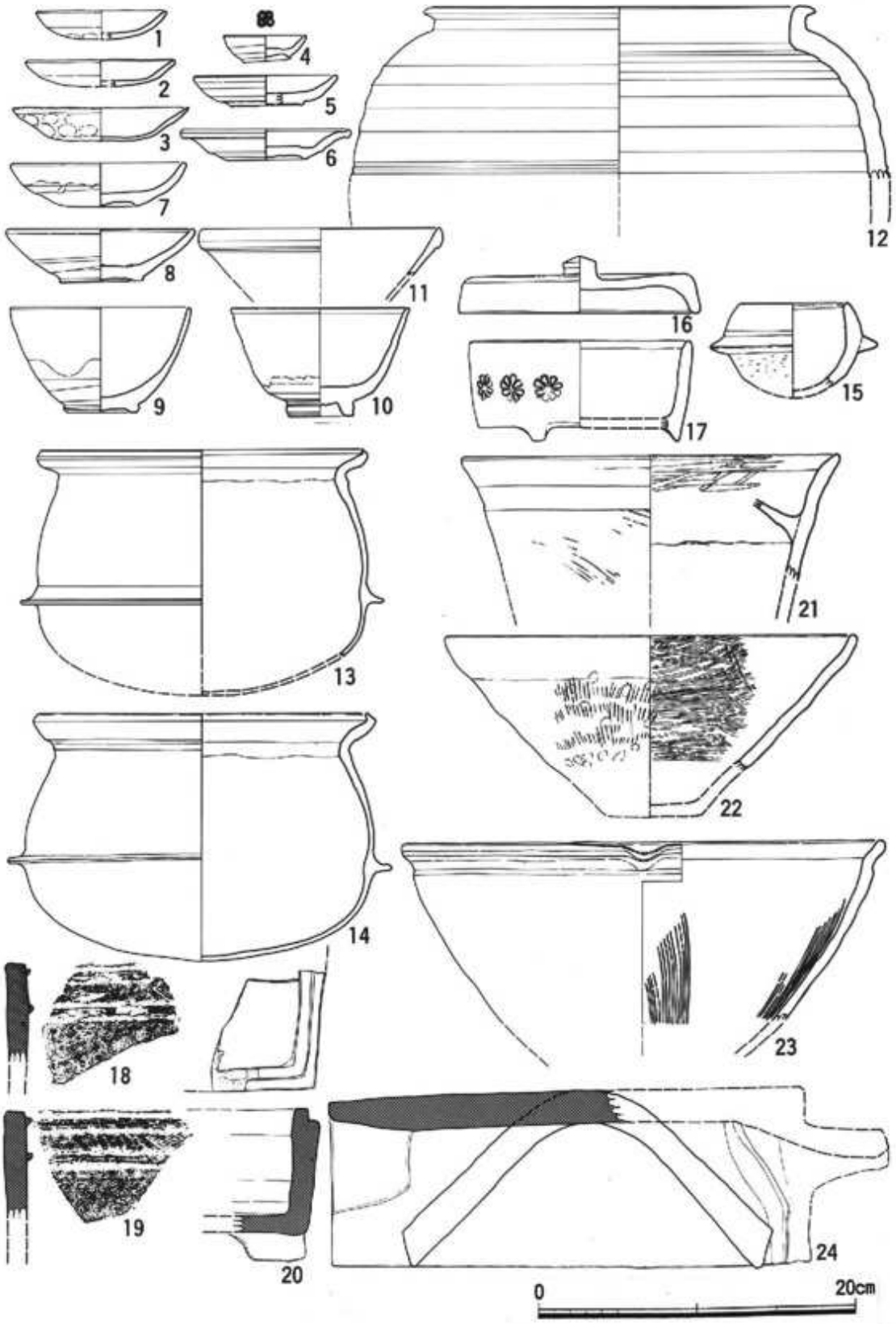
碗　９・10は灰釉碗である。９は瀬戸・美濃系と思われる。内湾ぎみに立ち上がる体部を有し、高台はヘラ切りによって突出させる。体部外面上半と内面に釉がかかる。10は外反ぎみに立ち上がる体部に大きく突出させた高台がつく。11は白磁碗である。口縁部外側を肥厚させる。

大甕　12は備前の水屋甕である。肩のはる胴部に小さく直立する口縁部がつく。口縁端部は外方へ突出する。胴部にはロクロ成形痕が残る。胴部中央には２条の沈線がめぐる。焼成は良好で赤褐色を呈す。

羽釜　13・14は土師質の羽釜である。鍋形の体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は内側へ鋭く折り返す。鍔は小さく体部下位にめぐらされる。口縁部と鍔付近にはヨコナデがみられる。他の部位は丁寧にナデ調整がおこなわれる。15は瓦質の小形羽釜である。球形の体部と体部中央にめぐる鍔からなる。口縁部は体部の一部で、端部は円頭状におわる。鍔より下位にはケズリがみられる。外面には全体に煤が付着する。

瓦質土器　16～23は瓦質土器で、各器種みられる。16は壺の蓋と思われ、口径15cm、器高3.6cmを計る。扁平な体部に宝珠状のつまみがつく。体部は回転ヨコナデがおこなわれている。外面には煤が付着する。17は円形の香炉形の土器である。直立する体部に３カ所の脚台がつく。体部中央には円形花紋の押印をめぐらす。内面には煤が付着する。18・19は円形の火舎である。口縁部外側に２条の貼り付け突帯をめぐらし、突帯間には菱形の押印がある。20は方形の盤で、口縁部は受部をこしらえている。21は不明容器で、外反する体部とその内部に受部をつくる。口縁部内面にはミガキが施されている。22は錬鉢である。外面には粗いハケ、内面にはミガキが施されている。23は摺鉢で片口を有する。口縁部はわずかに外反する。内面に櫛歯の摺目を施す。

瓦　瓦は丸瓦・平瓦・雁振瓦が出土している。24は雁振瓦の破片で、推定全長36cm、幅22cmを計る。外面は板状工具でナデ、内面には布目が残されている。



第25図　SD−02 出土遺物（S＝¼）

ＳＤ－01出土遺物（第26図）

ＳＤ－01は再掘削されており、大きく二時期の遺物に分かれる。再掘削後の遺物には近世初頭の遺物と江戸後期の遺物が混在しているが、量的には前者の遺物は非常に少ない。遺物の大半は溝の上層から出土している。また、遺物の接合から溝の中位以上は接合関係がみられ、ほとんど時期差はみられない。土器は古伊万里系の茶碗類が非常に多い。土器類については第26図に良好なものを掲載したので順次説明する。

土師皿　1～3は土師皿で、1・2は同じ形態のものである。これらは口縁部から内面にかけてヨコナデが施され、底部には指頭圧痕を残す。3はやや深い体部を有するもので、胎土も前者と異なり、砂粒を多く含んでいる。

染付磁器　4～8は伊万里系の染付磁器と思われる。4は仏餉碗で、外面は草文らしきものを描く。5～8は碗である。5は碗上部に笹文、下部に草花文を染付けている。6は草文、7は草花文を外面に各々描いている。また、7の高台裏には略字があるが判読できない。8は厚手のつくりで釉も厚く貫入がある。外面には山水図を染付ける。9は皿で内面に網目文と笹文を配置する。

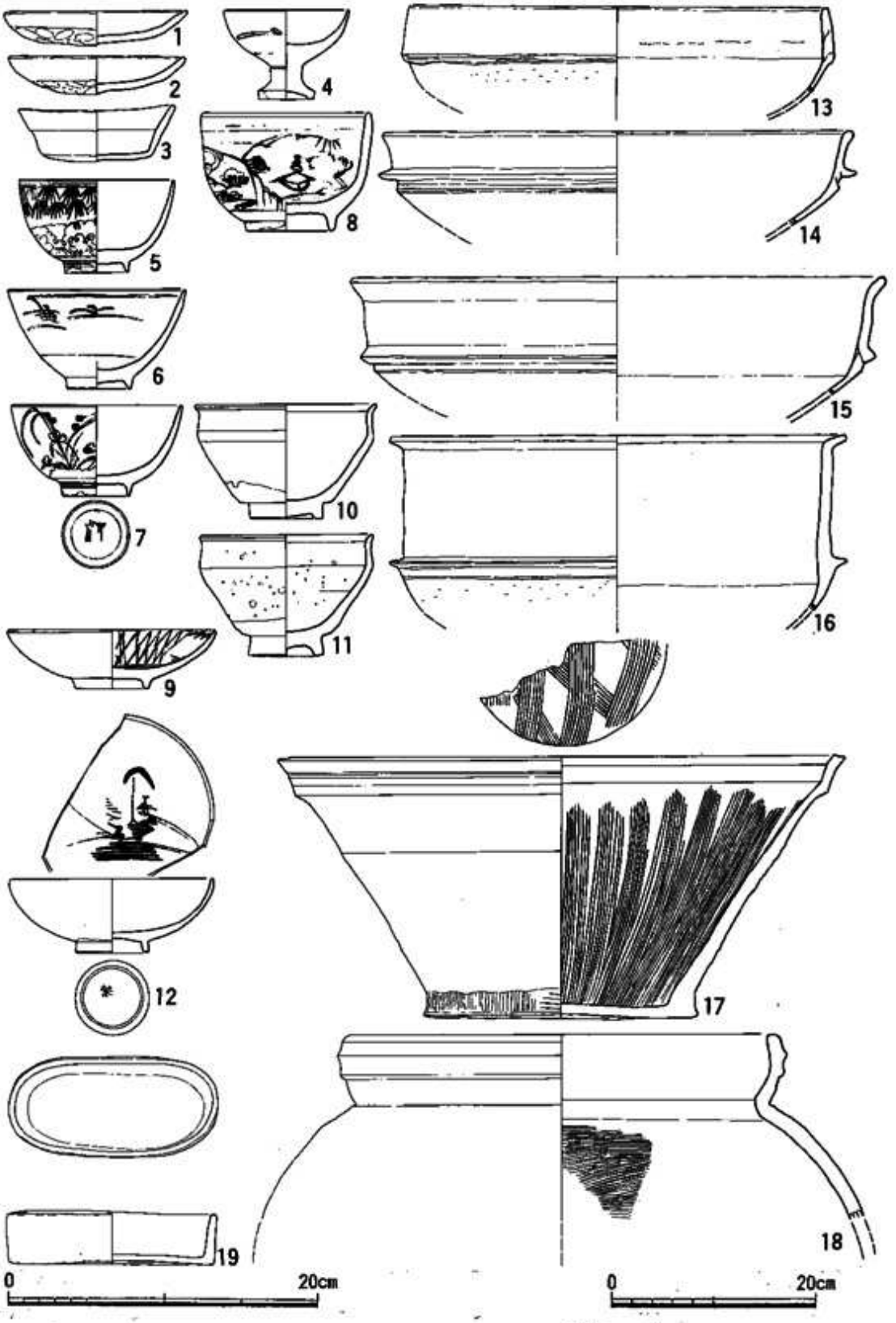
施釉陶器　10・11は天目茶碗である。同形態のもので、口縁部は小さく外反する。体部上位で稜線をもつ。高台は削り出し高台で、体部との境は段を有する。両者とも暗褐色の鉄釉がかかる。11は釉薬が気泡化し、器面が荒れている。12は京焼系の皿である。釉は暗褐色を呈し、貫入がはいる。内面には山水図が描かれている。高台裏には「柴」の印字がみられる。

土釜　13～16は各形態の土釜である。これらの土釜は薄く浅い底部を有するが、底部からの立ち上がる体部と口縁部が異なる。底部はケズリをおこない薄くし、最終的にケズリをナデ消している。口縁部にはヨコナデがみられる。13は鍔をもたない形態で、口縁部は短く立ち上がる。口縁部と底部との境にはミガキが施される。鍔より上部には煤が付着する。14は鋭く突出する鍔をもつ。鍔の下には凹線がめぐり、底部との境にはミガキが施される。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。15・16は鍔をもつ形態であるが、口縁部の外反が異なる。15は口縁の外反はゆるやかである。16は直立する体部に鋭く外反する口縁がつく。体部上半には煤が付着する。

擂鉢　17は備前の擂鉢である。底部から大きく外反し、一段外側に口縁部がつく。口縁端部は面をもち、上端はわずかに凹面となる。外面底部にはハケが残る。底部裏面には砂目が残る。内面は9本一単位（1.8cm）の櫛状工具で擂り目をつくる。内面の底部ちかくには重ね焼きの痕跡を残す。焼成良好で赤褐色を呈す。

大甕　18は備前の大甕である。肩の張る胴部に短く内湾ぎみに立ち上がる口縁がつく。口縁部はヨコナデによって凹線状の凹凸がめぐる。内面にはハケ調整がみられる。焼成良好で赤褐色を呈す。

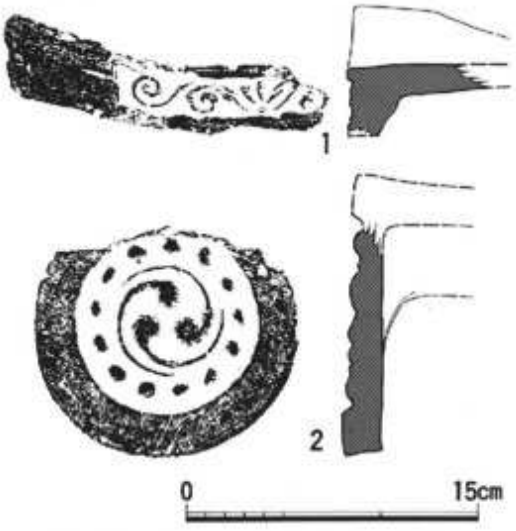
髪盥　19は長楕円形の髪盥である。底部裏面の他全面に暗黄色の釉がかかる。底部と体部は別に成形し接合したものと思われる。底部中央はやや浮き上がり凸面をなす。この他、2点の同形の髪盥が出土している。



第26図　SD−01出土遺物（S＝¼，18:S＝⅙）

ＳＤ－01出土瓦

ＳＤ－01からは少量ながらも軒平瓦、軒丸瓦、平瓦が出土している。第27図－１は軒平瓦の瓦当左半分である。周縁は広巾になり、中央の文様には唐草文がみられる。外郭線は消滅している。第27図－２は軒丸瓦である。周縁は巾広くなり、周縁高も文様高とあまり変わらない高さになる。文様は外側に珠文帯、内側に巴文を配す。珠文は大きく13個がつく。巴文は巴の尾が短く、隣の尾とは結合していない。また、巴の頭部は丸く大きい。

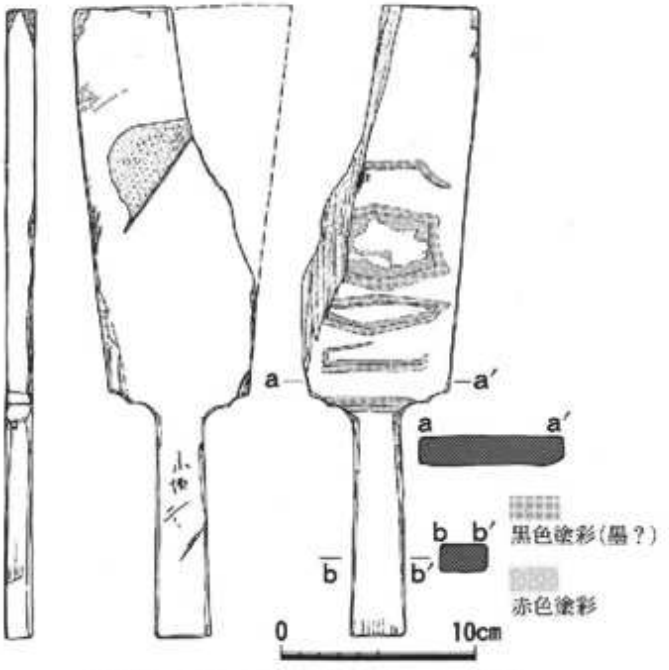


第27図　SD－01 出土瓦（S＝¼）

ＳＤ－01出土木製品

ＳＤ－01からは漆椀や漆塗箱（図版14－5）、曲物、羽子板などが出土している。これらは全て江戸時代の所産のものである。

第28図は溝の中層より出土した羽子板である。全長32.3cmを計るもので一枚の板を成形している。羽を打つ面と柄から成るが、柄との界には二段の抉りをつけ装飾としている。表は無文であるが、柄の部分には「小坂□」と判読できる線刻がみられる。□については文字かキズかはわからない。おそらく、この羽子板の持ち主の氏名と思われる。裏面には黒色と赤色の顔料による文様が描かれているが、顔料がおちてしまい文様の一部は失なわれている。文様は幾何学文様らしきもので、文様の外側を黒色で囲み、内側を赤色でうめた簡素な表現のものである。



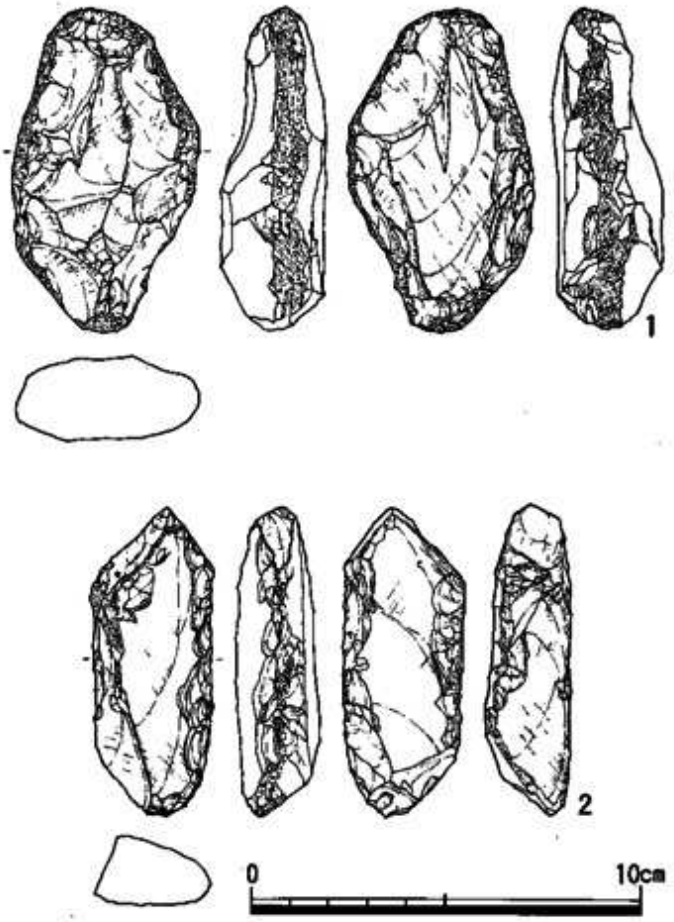
第28図　SD－01 出土木製品（S＝¼）

ＳＤ－01出土石製品

火打ち石

本遺跡ではサヌカイトおよびチャートを利用した火打ち石が８点出土した。石材についてはサ

ヌカイト７点に対しチャート１点と圧倒的にサヌカイトが凌駕している。また、サヌカイトでは他にＳＤ－01より石核が２点出土しており、火打ち石の素材である可能性が強い。ＳＤ－01からは５点の火打ち石が出土しており、ここではそのうち２点について説明することにする。いずれもサヌカイト製で風化の進行度が弱く、色調は黒色を示す。



第29図　SD－01 出土土器（S＝½）

１は楕円形を呈し、全周にわたって著しい打撃痕を残している。分厚い剥片を素材としており、右面中央部には素材剥片の主要剥離面が大きく残存している。器面の全周をとりまく剥離痕は打撃によって生じたもので、細かな階段状剥離が著しく、剥離の方向も不規則である。２は分厚い縦長の剥片を素材とし、側縁および稜線上に打撃痕が残されている。打撃痕は概して線状を示し、器面にみられる剥離痕はこうした打撃痕に沿って生じており、部分的に剥離が重複している。１と２では打撃痕のあり方に若干の違いがみられ、１は全周のみに打撃が著しくおこなわれ、あたかもハンマーストーン様を呈していることに対し、２は側縁・稜線上を線状に敲打され、２の石自身が打撃具として使用された形跡は窺いにくい。つまり、１は加撃する用具として、２は加撃される用具としての用途が考えられる。

従来、火打ち石として用いられた石材には石英・黒耀石・珪岩・玉髄などがあり、その先鋭は稜角を打ち合わせることによって発火させたようであるが、これらの石材はいずれも硬質で緻密なうえ貝殻状の割れ口を生じるもので、鋭利な稜角が作り出されるといった特徴がある。本遺跡で盛用されたサヌカイトもこうした特徴が認められ、火打ち石としての石材選択に際して重要なポイントとなったと思われる。このことは、ＳＤ－01から出土したサヌカイト製の石核の存在からも知ることができ、いかにサヌカイトへの依存が高かったを窺わせている。出土した２点の石

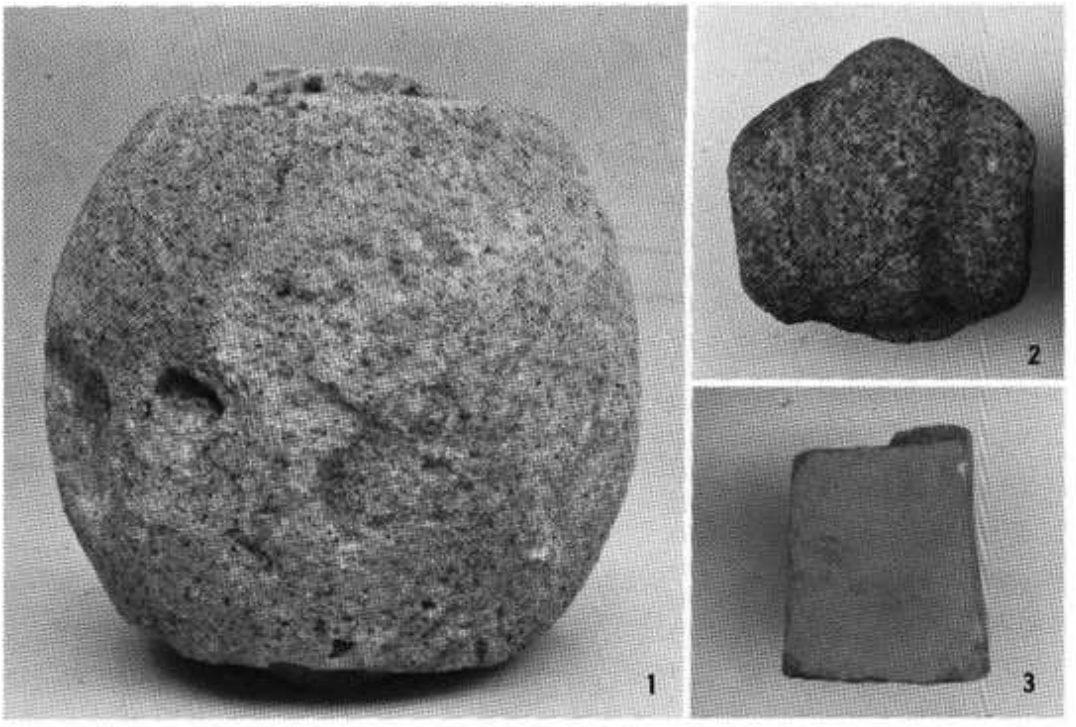


写真2　SD−01・SD−02出土石製品（1：S＝⅓，2・3：S＝½）

核のうち1点は著しく風化が進行しており、石材の供給を二上山麓へ求めることもできるが、本遺跡周辺においても弥生時代の遺跡からは多量のサヌカイトが採取することができることから、こうした転石を利用した可能性が強いと思われる。

なお、同町に所在する黒田遺跡からも本遺跡出土の火打ち石と類似したものが多量に出土しており、今後サヌカイト製の火打ち石における分析を進めて行きたい。

五輪塔

写真2－1は五輪塔の水部にあたると思われるものでＳＤ－01より出土した。軟らかい凝灰岩を加工し、球形につくり出している。形態はやや縦長の球形で、天地左右はほぼ対象になる。上部と下部に直径9㎝、高さ 1.5㎝の扁平な突起をつくり出し、地輪及び火輪にはめこめるようにしている。胴径23.5㎝、胴部の高さ約20㎝を計る。一部の表面が欠損しているが、ほぼ全容が把握できるものである。この種の五輪塔の残欠と思われる凝灰岩はＳＤ－02からも出土しており、中世以降散逸したものと考えられる。

灯籠・砥石

写真2－2はＳＤ－01より出土した灯籠笠部の残欠である。笠部の先端の巻き上げた所で、正面は三輪玉状につくり、側面には渦文を刻む。幅 9.2㎝を計る。写真2－3はＳＤ－02より出土した砥石で一端を欠く。表裏及び両側面に研磨痕がみられる。現長 7.6㎝を計る。

Ⅳ．まとめ

1．里中古墳について

奈良盆地低地部の古墳の調査例は少なく、その点において里中古墳の実態が明らかにされたことは意義深いことである。調査例が少ないだけ、本墳の位置づけもまた、困難であるが二、三課題を提出し、まとめとしておきたい。

里中古墳は幅４ｍの周濠を有する径21.5ｍの円墳である。低地部にあっては10ｍ級の規模のものが多いが、その中ではやや大きな部類に入ると思われる。本墳が群構成をなすのか、単独墳になるのかは周辺の調査を待たなければならないが、数基で構成される古墳群になる可能性が高い。立地からみるならば、羽子田遺跡[①]（古墳？）の群、唐古・鍵遺跡・石見遺跡[②]の群があり、この両群に挟まれているのが里中古墳の群と考えられる。各々は谷を隔てて群構成をなすのであろう。里中古墳においては主体部や副葬品に関することは全くわからないが、この古墳が群の中において、さらにはこの古墳群が盆地内の古墳群の中においてどのような位置にあったか、今後の課題である。里中古墳からは多種の形象埴輪が出土し、形象埴輪をもつ中小古墳の一つになった。これらの中小古墳は大古墳と形象埴輪の種類の上では変わらないものもあり、形象をもつ中小古墳の意義は大きい。里中古墳にあっては三宅古墳群のように前方後円墳を有する古墳群でない点から、その群も下位のクラスである点はまちがいないが、矢部遺跡[③]にみられるような方形周溝墓群とはかなりの格差をもっていると考えられる。

第１表　奈良県における多種形象埴輪を有する小古墳及び出土地一覧表

遺跡名	墳形・出土地	規模(m)	蓋	家	盾	靫	兜・短甲	人物男女	馬	牛	鹿	鶏	水鳥
小阪里中古墳	円　墳	径 21.5	○	○	○			?○	○			○	
大和３号墳[④]	円　墳	径 9.3	○	○	○				○				
森本・寺山13号墳[⑤]	円　墳	径 20					○	○					
市尾今田２号墳[⑥]	方　墳	一辺 18	○	○	○		○						
箸尾遺跡SX-08[⑦]	方　墳	一辺 16		○				○○				○	
石見遺跡	出土地		○	○	○			○○	○		○		
羽子田遺跡	出土地		○		○			○		○			
能登遺跡[⑧]	出土地			○	○			○				○	○

円筒埴輪は原位置を保ったものは１本もないが、墳丘から崩れ落ちたものが多く、比較的残りがいい。形態・手法的にはほぼ二大別される。記号文も多くの同筒埴輪にみられ、その記号も数種類に分類が可能である。本報告には埴輪の手法と記号の関係を明らかにしたい。また、本墳からも不明木製品が出土しており、本来、古墳には埴輪の他に木製品が飾られていたのであろう。木製品がこのような小規模な古墳まで伴っている点は形象埴輪の種類とともに注目される。

2．中・近世の遺構と小坂氏について

本調査では、中世末期から近世までの遺構を多く検出した。遺構としては、溝・土坑・井戸で建物跡については明らかにできなかった。時期的には、15～19世紀にわたるが、16・17世紀と18・19世紀が中心的な時期である。遺跡地の変遷を大溝によって考えると、15世紀から16世紀にはＳＤ－03・ＳＤ－1003によって区画された地区が調査地の西側に存在することになる。16世紀後半にはＳＤ－01・ＳＤ－02によって東西南北に溝が掘削され、四分割される。その後、17世紀代にはＳＤ－02は埋没し、南北の区画はなくなり、東西の二区画となる。この時期が17世紀終わりから19世紀にかけての頃で、この時期のＳＤ－01の溝から「小坂□」の羽子板が出土している。考古学的には本地は三つの変遷がみられるようである。

ここで、小坂氏なる名が考古学的に明らかにされたことから、文献より小坂氏について少しまとめてみたい。小坂氏は『大乗院寺社雑事記』文明七年（1475）に「長谷川一党之内丹波・唐古東・小坂・戸嶋」とみえるのが初見と思われ、長谷川一党に組みこまれていた武士団の一つと考えられる。これについては、今なお続いておられる小阪氏の家系図（在原氏系図）からも知ることができる。「――朝廣―丹波守―廣元―小坂筑前守 永享元年―廣在―小坂盛守 寛正二年」と続き、この朝廣が丹波氏で法貴寺丹波山に城館を構えていたと推定される。これによると法貴寺一党である丹波氏から小坂氏が分かれ、15世紀前半には存在していたと考えられる。その後、小坂氏は18世紀初頭に分家され、西の小坂、東の小坂とよばれることになる。天保十四年（1831）の「春日若宮願主人由緒書写」[9]には小坂村惣代として小坂丹宮が、また、小坂村小坂主殿、吉田祐介なる名もみえる。小坂丹宮は西の小坂（本家）で、主殿が東の小坂（分家）であることが小阪氏の系図から判断される。さらに、吉田祐介なる名がみられるのは『大和志料』による寛文十二年(1672)「小坂村ニアリ吉田氏寺南都大乗院殿一代隠居寺也大石塔有之」にあり、この吉田氏であろうことは推測できる。また、この寺は安楽寺である。このように文献からみてくると、中世において長谷川党下にあった小坂氏が江戸時代にはいり、帰農し、小坂村の有力層となっていたことが窺える。

さて、発掘による成果と考え合わせると、西の小坂なる屋敷地が本地区西半であったことは容易に理解されるし、時期的にも合致する。今一つ、問題となるのは五輪塔や灯籠・瓦の出土である。本地には神宮寺なるものが調査地の南半に推定されるが、これが『大和志料』による安楽寺と考えられる。しかし、安楽寺が吉田氏寺とあり、小坂氏との関係が不明瞭である。考えられることは大溝による区画から、調査地の西半が小坂氏、東半が吉田氏の屋敷地であった可能性がある。このような成果から中世から近世に至る有力土豪層の一端に触れることができたことは意義深いこととなった。今後、中・近世における発掘が文献史料といか程、照合できるかが課題であるが、本遺跡の発掘は貴重な一例になった。

最後になったが、本文をまとめるにあたって、小阪幹文、吉田芳弘両氏には多大な御教授を賜わった。記して感謝します。

(注) ① 広瀬瑞弘『田原本郷土史』1951

② 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第16冊』) 1941

③ 寺沢薫編「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊』) 橿原考古学研究所 1986

④ 末永雅雄「大和宇和那辺古墳群の調査」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第4輯』) 1949

⑤ 松本洋明「森本・寺山遺跡第1次発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1982年度』) 橿原考古学研究所 1983

⑥ 今尾文昭「市尾今田古墳群」(『奈良県遺跡調査概報1981年度』) 橿原考古学研究所 1983

⑦ 中井一夫「箸尾遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1980年度』) 橿原考古学研究所 1982

⑧ 松本俊吉「大和国桜井町鳥見山麓発見の埴輪出土遺跡及び窯跡」(『考古学雑誌』第27巻第4号) 1937

⑨ 田原本町史編さん委員会『田原本町史』資料編第二巻 1986

(参 考 文 献)

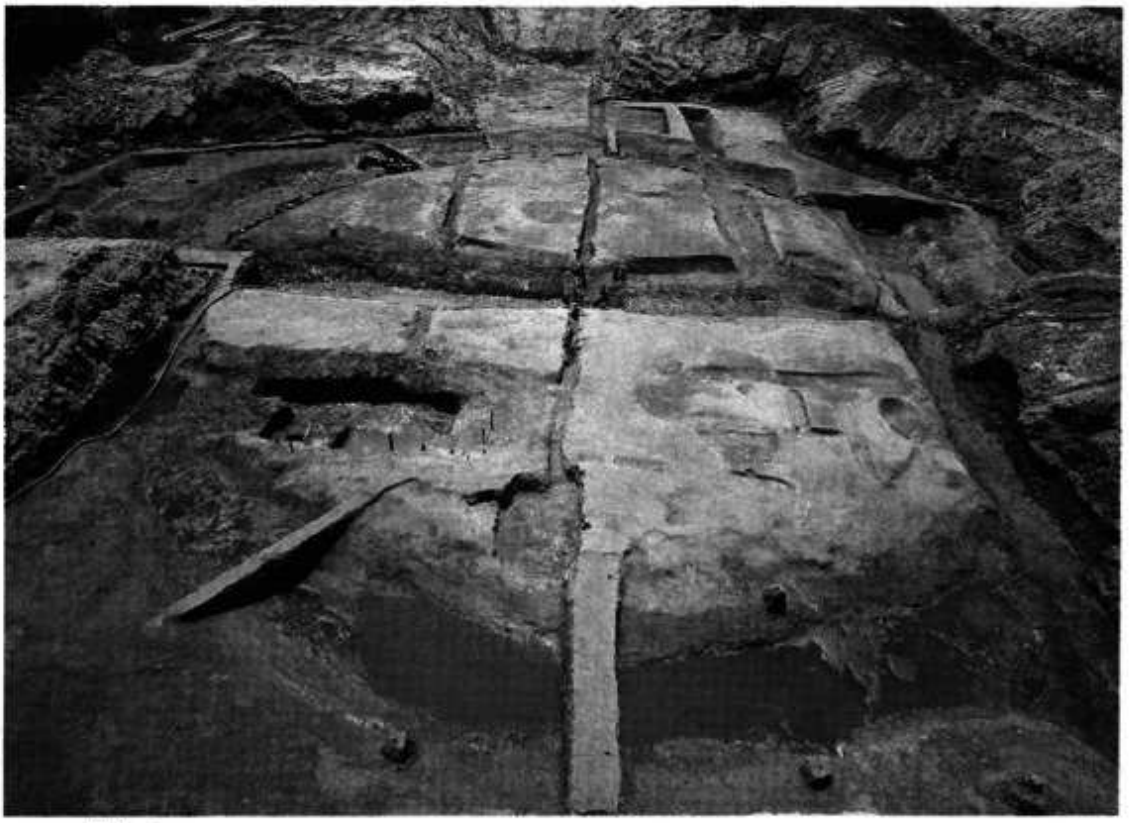
田原本町史編さん委員会『田原本町史』本文編 1986

図　版

図版1　調査地空中写真

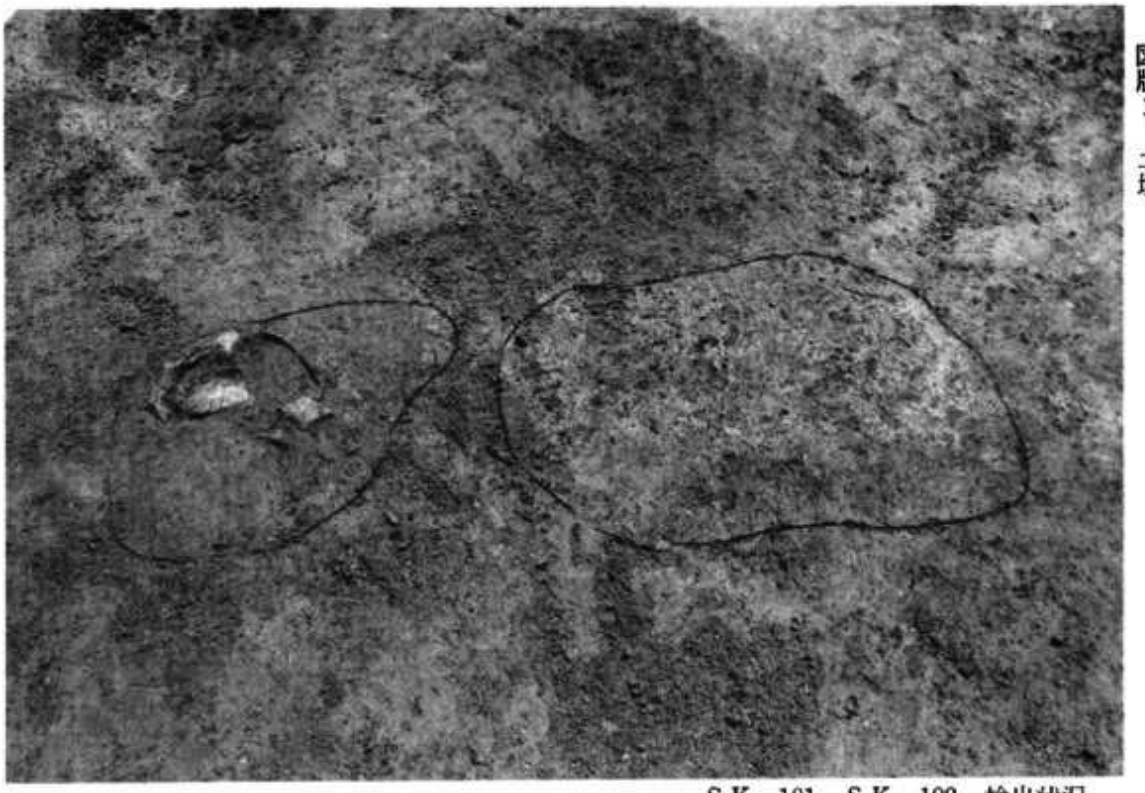
写真上が北

図版2　調査区全景

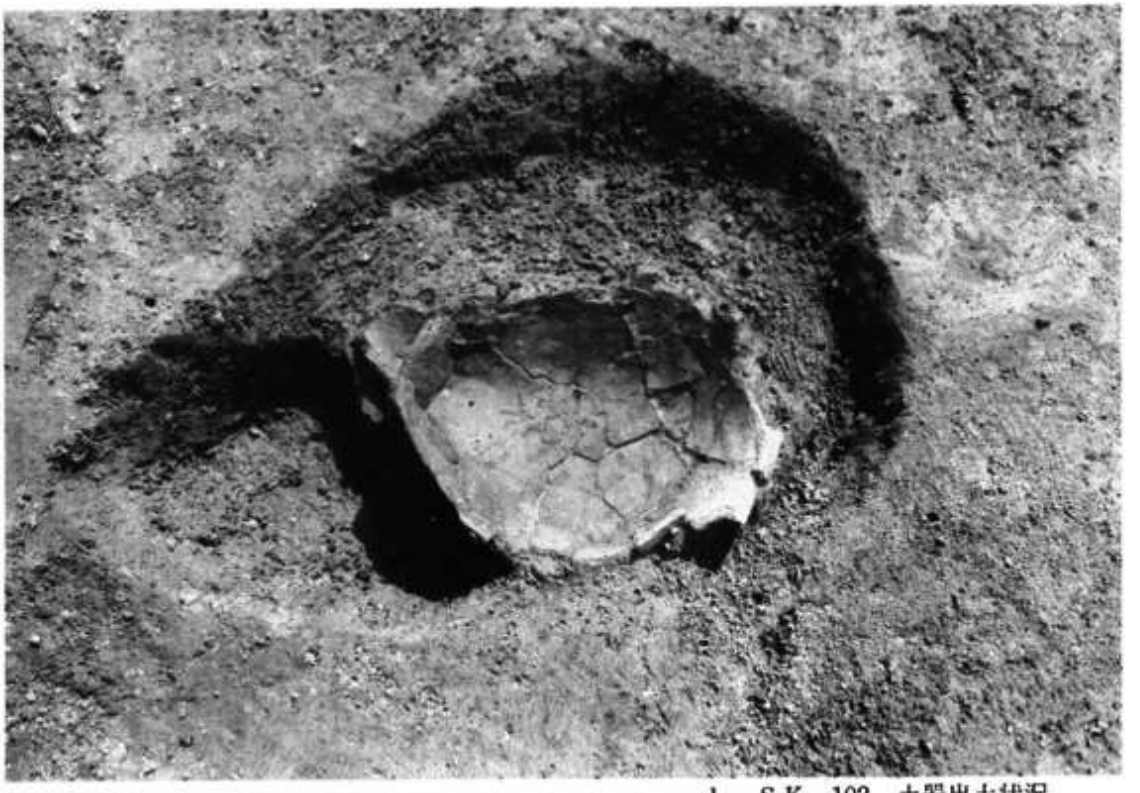


a．北から

b．西から



a．ＳＫ－101・ＳＫ－102　検出状況



b．ＳＫ－102　土器出土状況

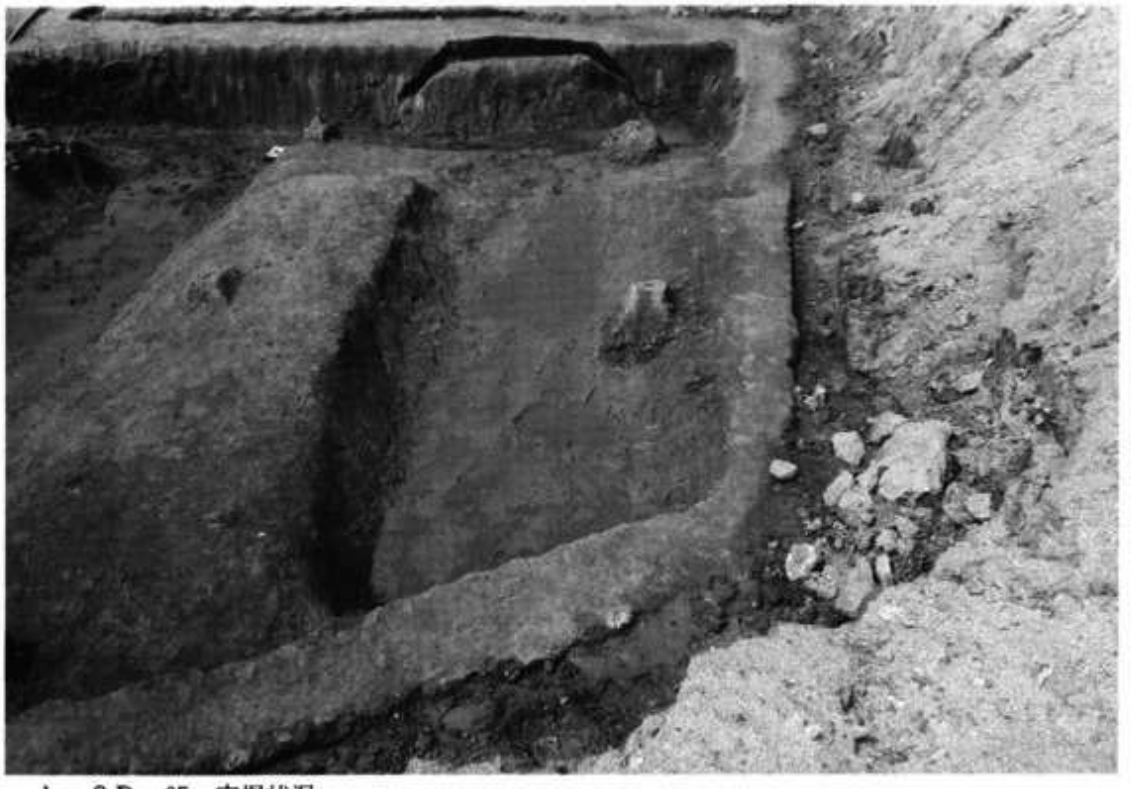
a．A区遺物出土状況

b．F区遺物出土状況

a．B区遺物出土状況

b．B区遺物出土状況

a．ＳＤ－03　完掘状況



b．ＳＤ－05　完掘状況

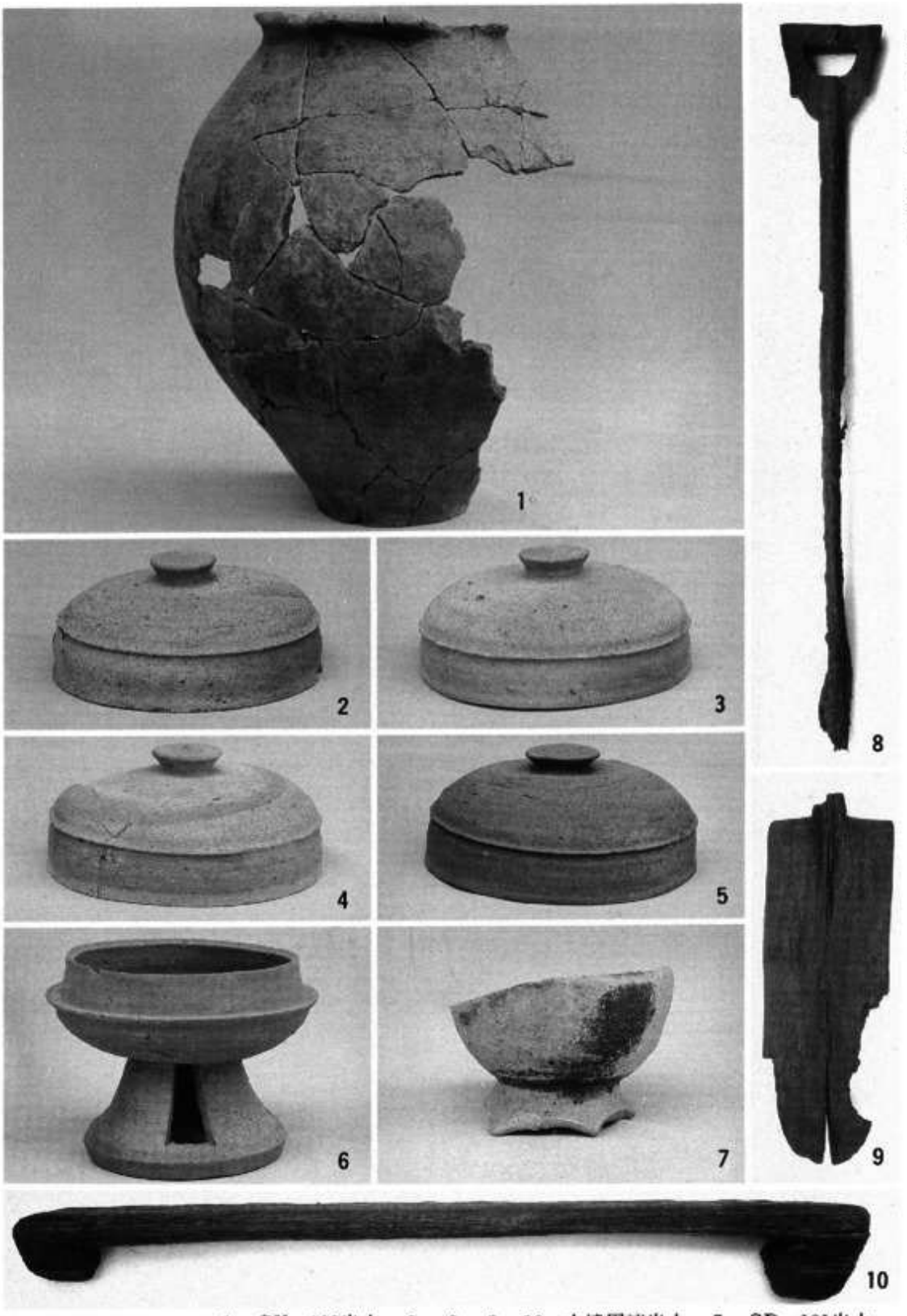
図版7 溝

a．ＳＤ－01　完掘状況

b．ＳＤ－02　完掘状況

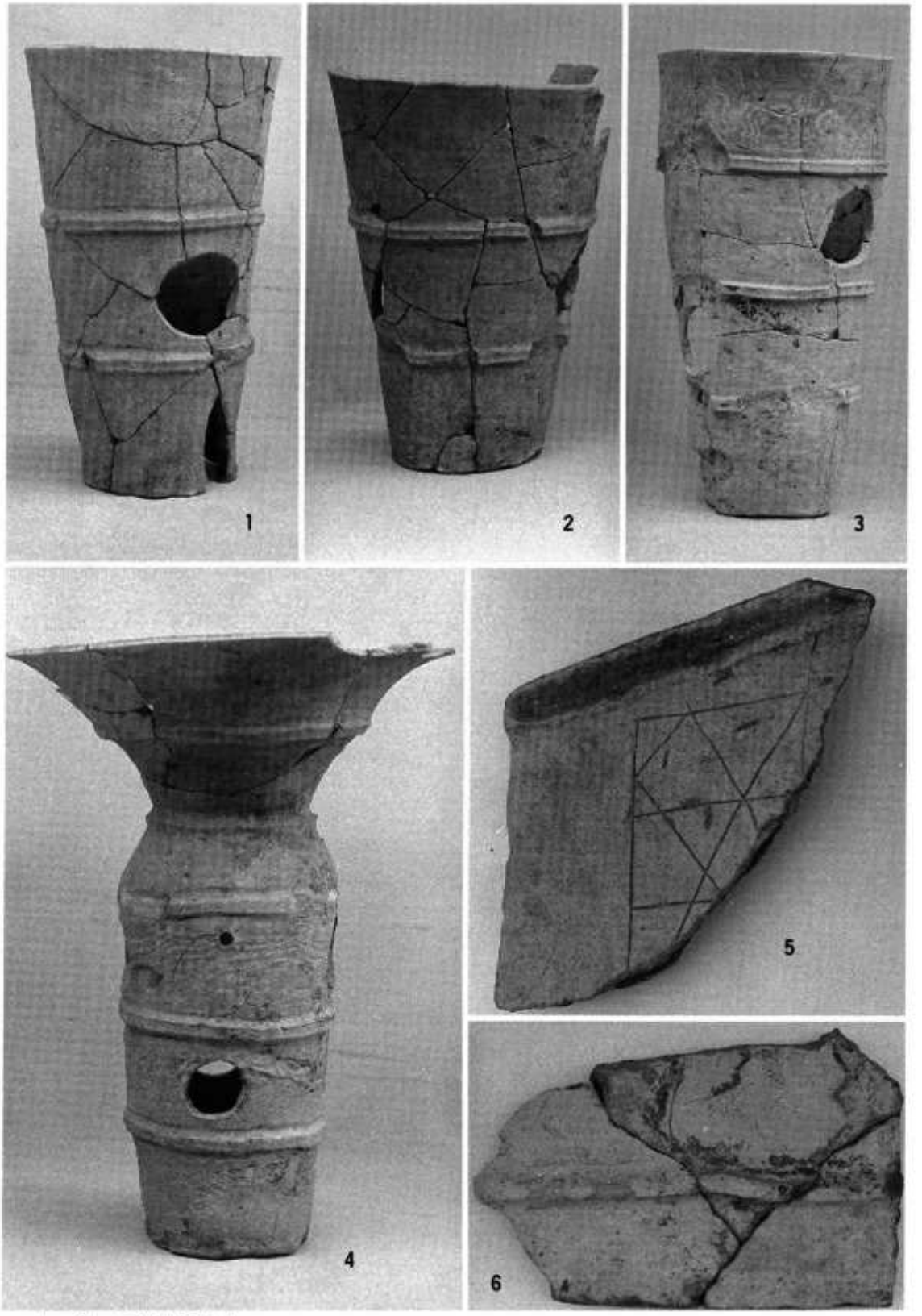
a．ＳＥ－01　井戸枠検出状況

b．ＳＫ－03　完掘状況

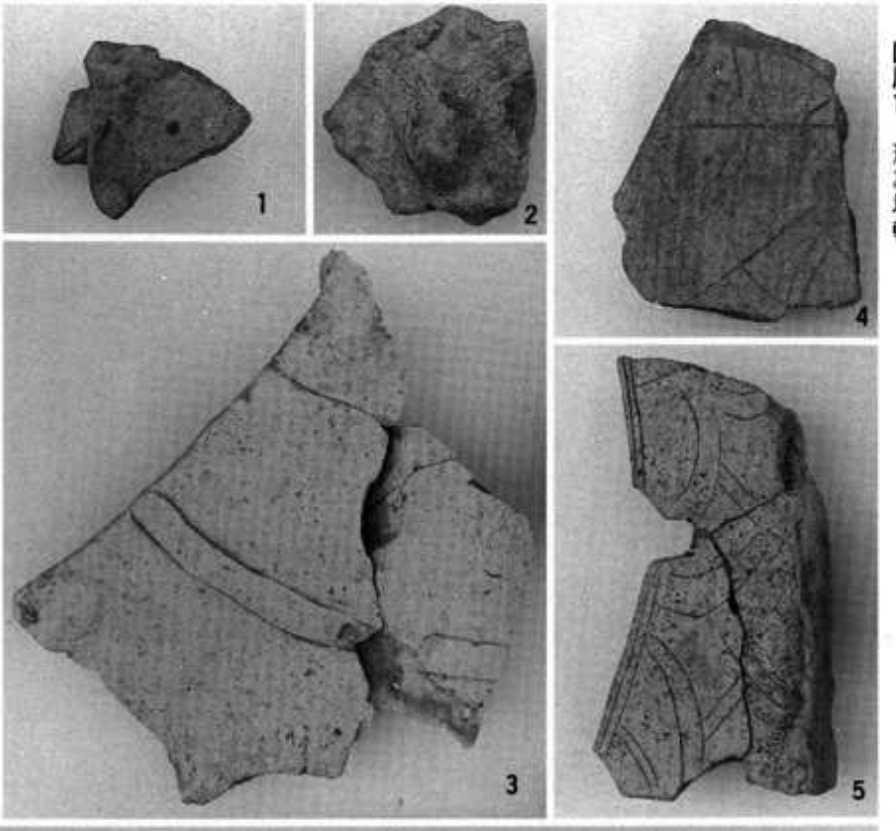


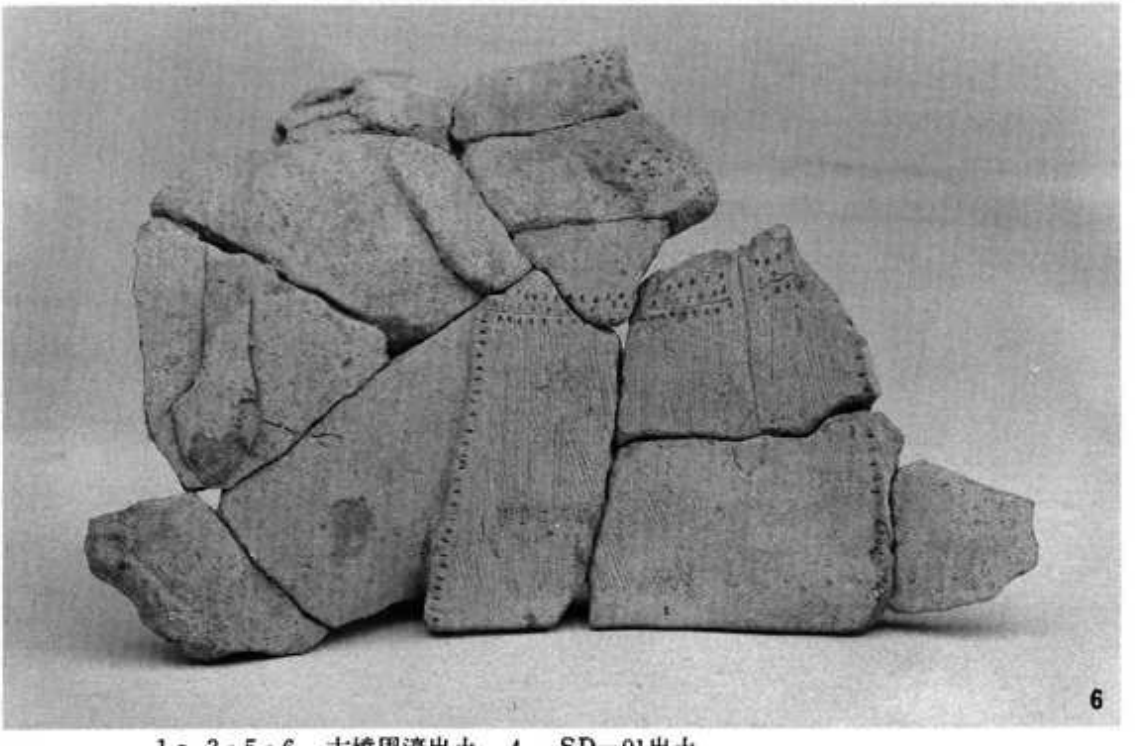
1－SK－102出土，2～6・8～10－古墳周濠出土，7－SD－101出土
1．弥生土器，2～7．須恵器，8・9．木製鋤，10．不明木製品

図版10　円筒埴輪・形象埴輪



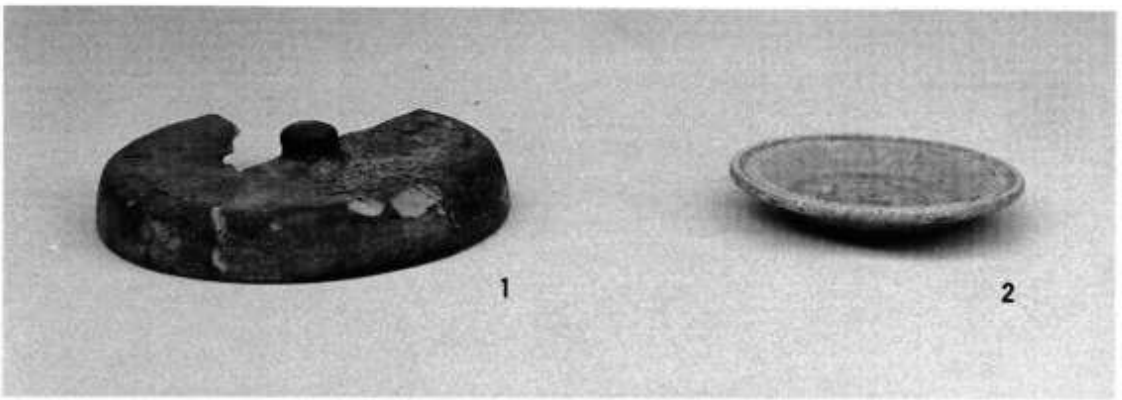
1～6－古墳周濠出土
1～3．円筒埴輪，4．朝顔形埴輪，5・6．家形埴輪

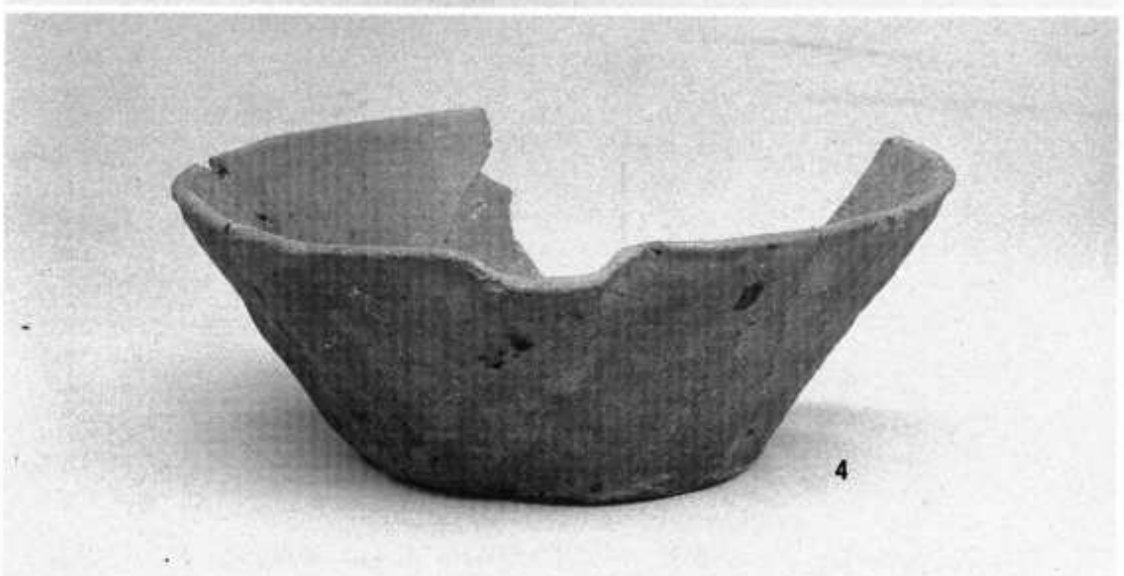




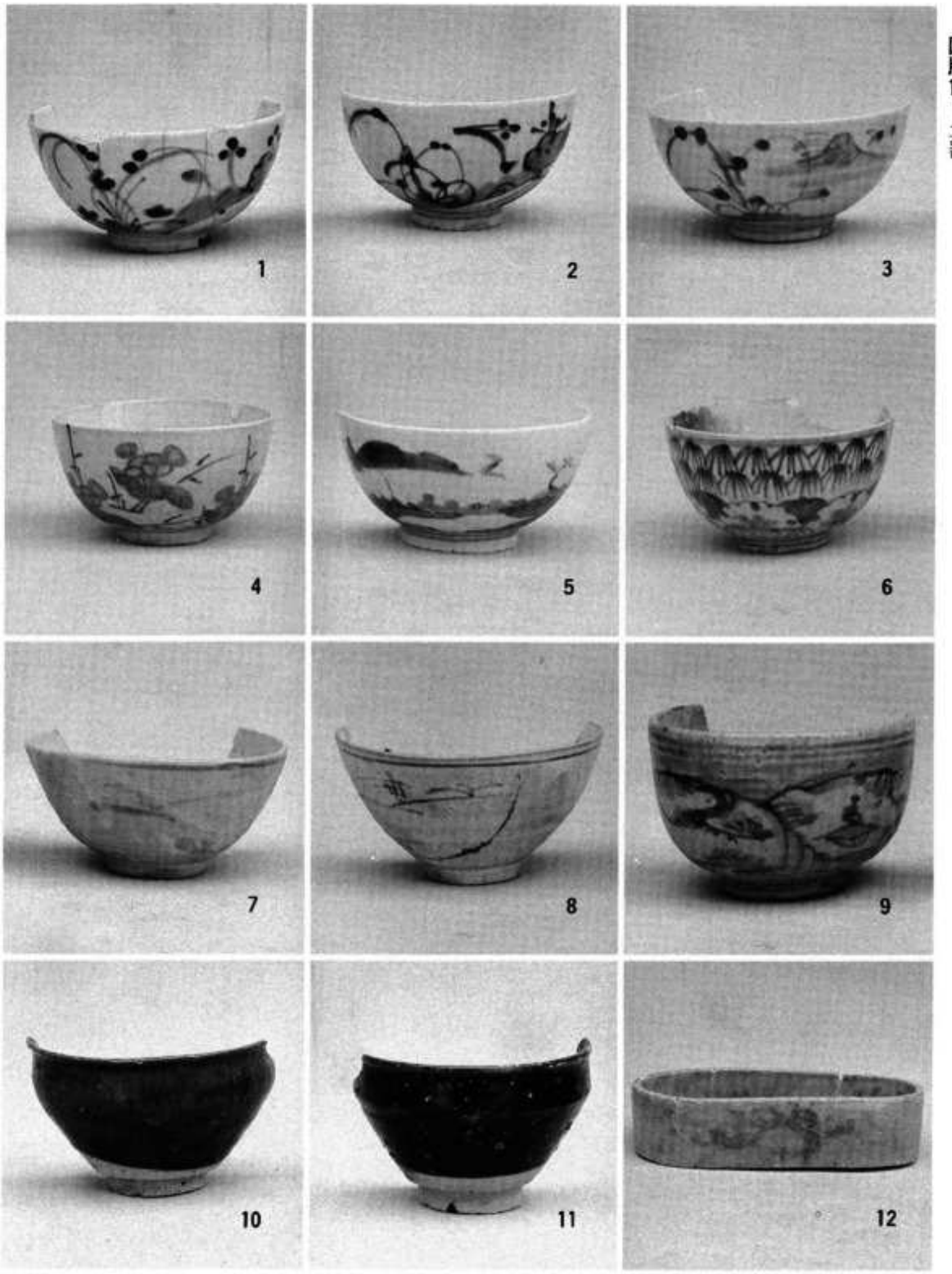
1～3・5・6－古墳周濠出土，4－SD－01出土

1．鶏形埴輪，2．不明形象，3．巫女形埴輪，4・5．盾形埴輪，6．馬形埴輪



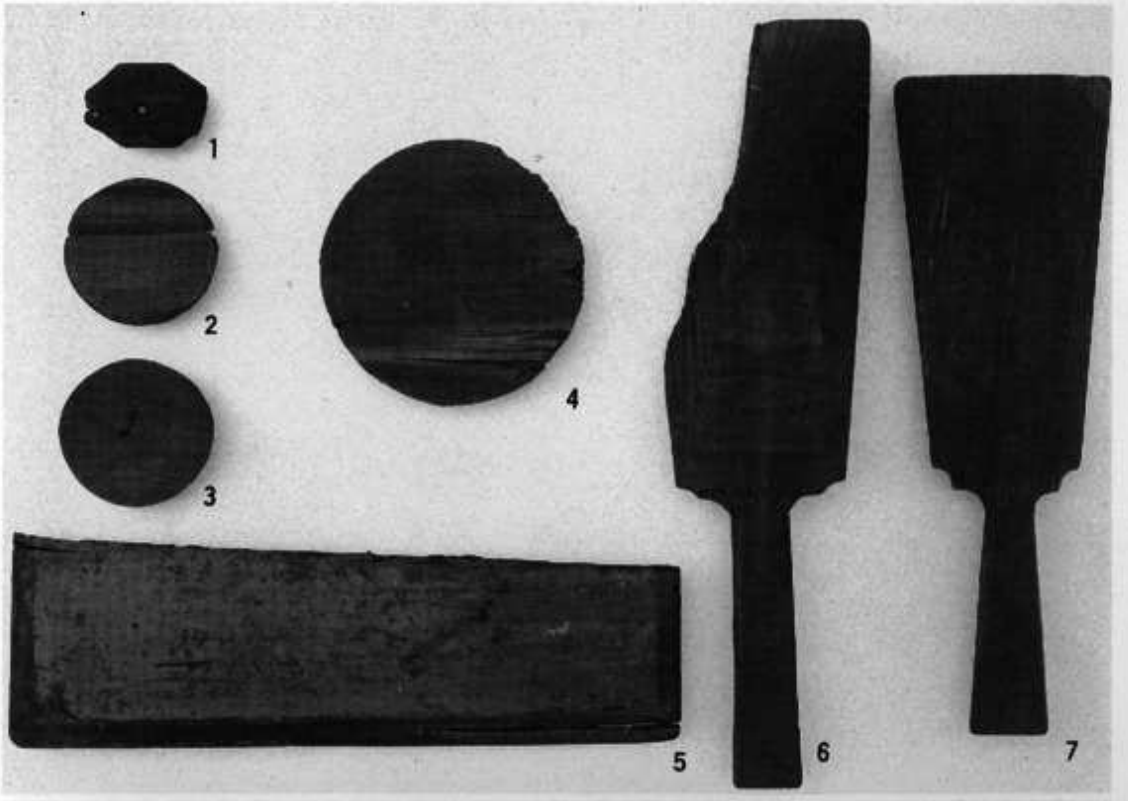


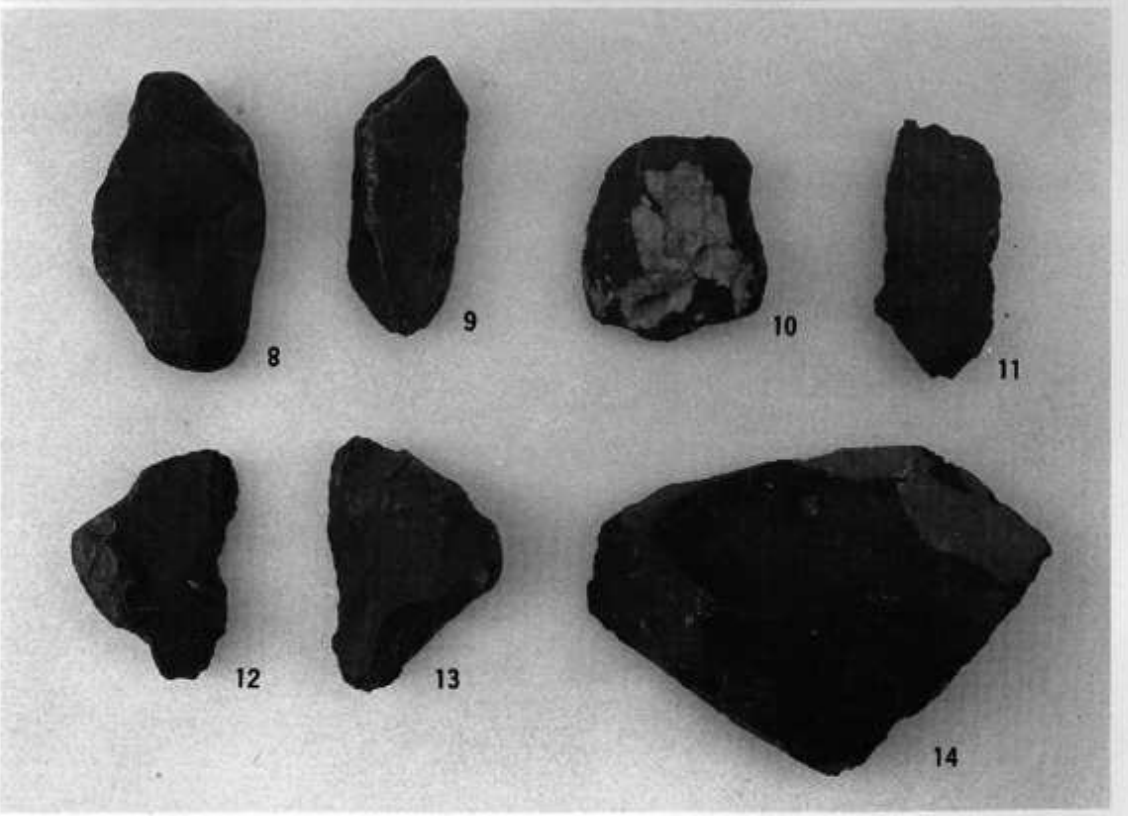
1～3－SD－02出土，4－SE－01出土
1．瓦盾蓋，2．灰釉皿，3．羽釜，4．鉢



1～12—SD—01出土
1～9．磁器碗，10・11．天目茶碗，12．髪盥

図版14　木製品・石製品





1～6・8～14－SD－01出土，7－SD－02出土

1．不明木製品，2～4．曲物木蓋・底板，5．漆塗箱，6・7．羽子板，8～14．火打石

田原本町埋蔵文化財調査概要5
小阪里中古墳・里中遺跡発掘調査概報
昭和62年3月31日
発　行　　田原本町教育委員会
印　刷　　関西美術印刷株式会社